天念寺耶馬及び無動寺耶馬　名勝調査報告書

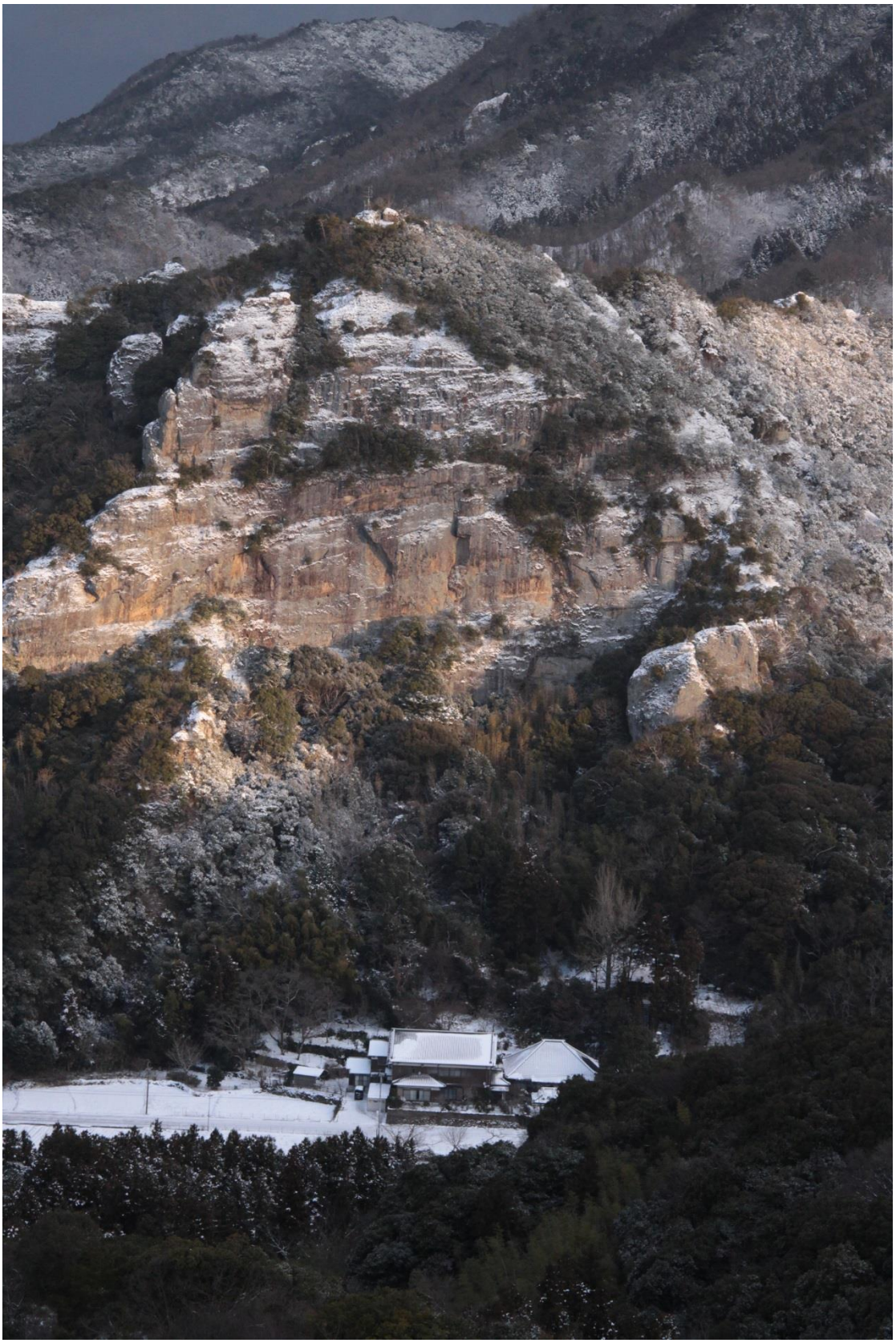
豊後高田市教育委員会

天念寺耶馬

天念寺講堂・身濯神社と耶馬

無動寺耶馬

無動寺耶馬からの眺望



天念寺耶馬から見た無動寺耶馬

天念寺耶馬　航空写真

無動寺耶馬　航空写真

例　　言

１、本調査報告書は、天念寺耶馬及び無動寺耶馬の意見具申に伴い作成した。

２、文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）』（平成２８年３月、以下『文化庁報告書』）で報告された天念寺後背の耶馬、無動寺後背の耶馬について、国指定名勝への意見具申に伴い、名称を「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」とする。

３、『文化庁報告書』以外に参考として文献・史資料は、最後にまとめて記す。

４、天念寺耶馬及び無動寺耶馬について、平澤毅氏（文化庁文化財部記念物課）、飯沼賢司氏（別府大学教授）、越智淳平氏（大分県教育庁文化課）、山路康弘氏（大分県教育庁文化課）にご指導、ご助言をいただいた。

５、本調査報告書の編集及び執筆は豊後高田市教育委員会の松本が担当した。

６、本調査報告書に使用した現況写真は、豊後高田市教育委員会が撮影したものや、『文化庁報告書』作成の際に大分県教育庁文化課が撮影したもの、大分県の文化財魅力度アップ事業でまとめた豊後高田市教育委員会『六郷満山寺院群詳細調査報告書』（平成２８年３月）の中で撮影されたものを使用した。また、航空写真については、豊後高田市耕地林業課がＧＩＳ用に撮影したものを使用した。

目　　次

第１章　天念寺耶馬及び無動寺耶馬と周辺の環境

第１節　自然的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
〈地理・地形的特徴／地質的特徴／周辺の植生〉
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
〈豊後高田市の歴史的環境／六郷山の成立と２つの耶馬／「六郷山長岩屋住僧置文案」と中世の六郷山／三浦梅園と天念寺耶馬〉
第３節　民俗的環境・・・・・・・・・・　・・・・・・・・・・12
〈地域の伝承／現代に伝わる修正鬼会／日本最古級の峯入りの行〉
第４節　社会的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第５節　これまでの研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

第２章　天念寺耶馬及び無動寺耶馬の概要

第１節　天念寺耶馬及び無動寺耶馬の風致景観の歴史的変遷・ 15
第２節　主要な構成要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
〈天念寺分（講堂／身濯神社／本堂及び庫裡／川中不動／小両子岩屋／龍門岩屋／無明橋）・無動寺分（本堂／身濯神社／一号岩屋／無明橋）〉・岩屋間の峯道・周辺の景観
第３節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第３節　天念寺耶馬及び無動寺耶馬と豊後高田市

第１節　名勝としての天念寺耶馬及び無動寺耶馬の意味・・・ 20
第２節　長岩屋伝統文化伝習施設「鬼会の里」の役割・・・・ 20
第３節　保存活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

資料編

①天念寺耶馬及び無動寺耶馬　周辺文化財・・・・・・・・・・・・23
②長岩屋地区及び黒土地区小字図・・・・・・・・・・・・・・・・24
③天念寺耶馬及び無動寺耶馬　範囲図・・・・・・・・・・・・・・25
④国東半島県立公園範囲図（該当地区抜粋）・・・・・・・・・・・ 26
⑤字図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
⑥字図（所有者別）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
⑦『大分縣社寺名勝圖録』所収銅版画（長岩屋山天念寺境内）・・ 29
⑧天念寺境内実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
⑨天念寺耶馬峯道及び岩屋・霊場位置図・・・・・・・・・・・・・31
⑩無動寺耶馬峯道及び岩屋・霊場位置図・・・・・・・・・・・・・32
⑪天念寺耶馬及び無動寺耶馬に関する文献等・・・・・・・・・・・33
〈六郷山長岩屋住僧置文案／六郷山年代記／三浦梅園撰鳥居銘（古写真・『梅園詩稿』）／天念寺由緒書／『大分縣社寺名勝圖録』所収「長岩屋山天念寺境内図」／西国東郡誌／種田山頭火書翰〉

写真編

A　現況写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
B　古写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
C　周辺写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

第１章　天念寺耶馬及び無動寺耶馬と周辺の環境

第１節　自然的環境

○地理・地形的特徴

豊後高田市は大分県北東部、国東半島の西側に位置し、人口は 23,232 人（平成 28 年 8 月現在）である。国東半島にはその中央の両子山を中心とする両子火山群が形成されており、岩峰と谷が放射状に広がっている。半島各所では多くの溶岩ドームが形成され、周辺の緩やかな丘陵地・山地と対置されるような石柱・尖頭型の岩峰が存在し、「●●耶馬」と言われる独特な岩峰景観を作り出している。

豊後高田市内では、竹田川、臼野川、真玉川、都甲川、桂川などの河口付近から沖積地が広がっており、半島の中心部に近づくにつれて細く狭い谷間となり、狭隘な地形の中に集落が存在している。そのような集落には、平安時代から続く六郷山の天台宗寺院が存在しており、後背の岩峰は修行の場として発展してきた歴史がある。

天念寺耶馬は、都甲谷の奥、北側に分岐した長岩屋の谷に位置する岩峰である。麓にある天念寺は標高 119m、耶馬の上は 200m超（無明橋が 211m）で、かなり急峻な地形の中に存在している。字名の長岩屋は、天念寺の中世における呼び名であり、講堂・身濯神社を含む一帯が 20m程の１つの長い岩屋の中に存在していることから名付けられたと考えられる。後背の岩山にも修行の岩峰が多数存在しており、人工的な整備（堂宇・仏像・壇の形成など）が認められる岩屋も多く存在している。現在では岩屋に対する信仰は廃れてしまっている部分も多いが、10 年に１度程度行われる岩峰を渡る修行「峯入り」を代表する霊場としてよく知られている。

川中にある大岩には、磨崖仏「川中不動（不動三尊像）」が彫られており、大岩の頂点付近には納経の為の孔が開いている。洪水を防ぐための祈願をしたと考えられており、地形を利用した信仰の姿の好例である。

天念寺耶馬の上に登ると、南側に長岩屋の谷、その奥には屋山が見え、北側には黒土の谷と無動寺、その奥には無動寺耶馬を望むことができる（周辺写真②）。耶馬の頂上から約 500mの峯道を下ると、無動寺・無動寺耶馬の麓まで到着するほど天念寺と無動寺は近い位置にある（資③）。

無動寺は真玉の谷の奥に位置する。都甲と真玉の谷の入口は 10ｋｍほど離れているが、両子山を中心に放射状に広がる谷は奥に行くほど間隔を狭め、天念寺・無動寺間は 700m程の距離になっている。

一方の無動寺は標高 87m、無明橋は 170m、耶馬の頂上は 230mほどで、前面に巨大な岩壁が見えることが特徴である。天念寺同様、耶馬の中に岩屋・社が設けられ、黒土岩屋とよばれる霊場であったと推定されている。ほとんど信仰は途絶えているものの、現在も堂宇が残る一号岩屋には不動明王の石仏が安置されている他、石祠や岩屋などの霊場が多く残されている。

無動寺耶馬に登ると真玉の谷がかなり広く見渡せる。無動寺の上側は分岐しており、三畑地区・小河内地区（共に圃場未整備地区）が見える。天念寺耶馬方面を見ると、長岩屋地区に細長く分布する耶馬、並石地区の鬼城耶馬（瀬戸内海国立公園の一部）が交じり合って見え、その岩柱の連続を１つの視界に収めることができる（周辺写真③）。

また、少し離れた場所にある長安寺・屋山の頂上から天念寺耶馬及び無動寺耶馬を見れば、そ

の２つの耶馬は隣接しているように見え、両者の関係性・連続性の高さを確認することができる（周辺写真⑤）。

○地質的特徴

大分県北部・西部・中部といった県下の大部分は、臼杵－八代構造線より北側の領家帯と呼ばれる花崗岩類と変成岩類で特徴付けられる地区に区分されており、国東半島もこの領家帯に位置している。また、国東半島ではその中央にある両子山（標高 720.8m）を中心に両子火山群が形成され、大嶽山、小門山、文殊山などから溶岩ドーム群を形成している。全体として概ね円錐形をしており、火山地形らしい地形をしている。南部分（田染地区など）に沖積期礫層・海成段丘が多く見られ、北部分（香々地地区など）にリアス式海岸が見られることから、比較的新しい時代に南部分が隆起、北部分が沈降したことが分かる。

国東半島は両子山から放射状に丘陵地や山地が広がっている。その一部には侵食を受けたメサ状地形（屋山・猪群山など）、ビュート状地形（西叡山・ハジカミ山など）が見られる他、各尾根や谷間に面した場所には、尖頭の岩峰群が見られる。これらは、耶馬溪層と称される凝灰角礫岩層が厚く堆積した箇所が、侵食されることによって、比較的硬い礫混じりの層が残ることによって発生し、岩峰が林立するような景観を作り出している。

これら地質的特徴は、大分県北から県西にかけての「耶馬溪」に通じるものがあり、周辺の岩峰の事を「●●耶馬」と呼ぶことが多い（市内では、天念寺耶馬・無動寺耶馬・夷耶馬・田染耶馬・鬼城耶馬がある）。

天念寺耶馬及び無動寺耶馬はその代表的な景観として知られ、寺院後背には鋭き屹立した岩峰景観が広がっている。角礫岩や火山灰・砂から形成された崖面はごつごつとした荒々しさを持っている。それが浸食されることによって、角礫岩が厚い箇所が相対的に残り、急崖ややせ尾根を作り出している。

また、角礫岩の密度の差により、穴状・室状に抉れた箇所や、不規則に削れた箇所が多数見られ、風光明媚な景観を作り出すだけではなく、山岳仏教文化の栄えた六郷満山においては、修行場としての岩屋・無明橋などが生み出されるための要因となったのである。

○周辺の植生

大分県の中でも国東半島は瀬戸内型気候域・旧火山地帯の植生が見られる。周防灘に面した地域は、年平均気温１５℃、年間降水量は 1500～1600mm であって夏季の雨量が少ない地域である。また冬季は周防灘を吹きぬける冬季北西季節風の影響でしばしば降雪をみる。

天念寺耶馬及び無動寺耶馬の範囲を含む凝灰岩上は夏季の乾燥も加わって主にイブキシモツケーイワヒバ群落に属しており、ブゼンシモツケ、マルバアオダモ、キハギ、イワヒバ、ススキ、イタチガヤ、イガリヤス、ハマカンギク、コツクバネウツギ、シノブ、ブゼンノギク、カワラヨモギ、ヒオウギ、タカネマンネングサの１４種がまとまって成育している。寺院周辺ではコジイ群落、ウラジロガシ群落も見ることができる。

特徴的な植物としては、マツバラン（マツバラン科の植物で、岩壁や岩の割れ目に着生する原始的な常緑性のシダ植物である。個体数は少なく 2009 年の調査では、天念寺耶馬の南向きの岩壁で発見された【大分県 RDB（準）】。）、サイコクイワギボウシ（ユリ科の多年草で岩場に生育する。花期は８～９月で紫の花をつける。国東半島南部を中心に広く分布。）、イブキシモツケ（バ

ラ科の落葉低木で樹高は1～1.5mになる。花弁が５枚の小さく白い花で構成される散房花序を展開する。)、コショウノキ（ジンチョウゲ科の植物で、高さは１m以下ほど、雌雄別株。蕚筒が４裂する花を１～４月につける)、イワギリソウ（イワタバコ科の多年草で岩場に成育する。紅紫色の小さな花を散状につける。人による採取により激減し絶滅が危惧される【環境省 RL（ＩB)・大分県 RDB（ＩA)】）などがある。

第２節　歴史的環境

○豊後高田市の歴史的環境

豊後高田市は豊後国の北東に位置し、瀬戸内海に向けて突き出た国東半島の西側に位置している。国東郡の六郷の内、来縄郷・田染郷・伊美郷の一部に含まれると考えられており、大分県立歴史博物館の国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査や、豊後高田市等の遺跡発掘調査によって、多数の縄文～弥生時代の集落遺跡が調査された他、猫石丸山古墳・入津原古墳・真玉大塚古墳・岬古墳といった古墳群、上野条里・荒尾払田条里・川原条里といった条里遺跡、カワラガマ遺跡・富貴寺遺跡・天念寺遺跡といった寺院遺跡の存在と意義が明らかにされていった。

沖積地や盆地に広がる水田は、後に宇佐宮やその神宮寺・弥勒寺の荘園へと成長していく。市内では、田染荘・来縄郷が宇佐宮領、都甲荘・小野荘・草地荘・真玉荘・香々地荘が弥勒寺領として成立し、各地域の歴史的景観の基礎となっている。その一方で、条里や荘園として発達できなかった半島の中心部の狭隘な地域には、六郷満山寺院を中心とした開発が行われ、かつては「大魔所」と呼ばれた劣悪な環境を打破した六郷山の住僧によって、小規模な坊集落がつくられていった。特に天念寺については、「六郷山長岩屋住僧置文案」などの古文書を巡る検討によって、坊集落の状況（坊や屋敷地の比定）や、「住僧」たちの生活と信仰が如実に判明している。

中世に入ると武士の活動も多く見られる。都甲荘・真玉荘などの荘官出身の武士、都甲氏・真玉氏が御家人となって活躍した他、戦国時代には大友氏の重臣である吉弘氏・田原氏などが市域で活躍していた。彼らは六郷山寺院を侵略する「押領者」として捉えられる一方で、六郷山文化を積極的に保護した仏教文化の担い手でもあった。特に吉弘氏は屋山の院主や六郷山別当職を占め、各寺院への寄進・修理を行っていたことが分かっており（「六郷山年代記」など)、天念寺に関しても戦国時代に行なわれた大般若経の写経・奉納の協力者になっている（奥書に吉弘鎮信の署名が残されている)。

江戸時代には竹中氏による高田藩が成立したが、江戸時代前期には所替えとなり、最終的には高田地区のほとんどは島原藩に編入された。その後、豊後高田市から宇佐市に跨る豊州御領は、島原藩の財政を支える重要な地域となり、島原本領との結び付きを求めて港町・高田は商業の町としての芽を出すことになる。陣屋町として発展した屋敷地の広がりは、現在「昭和の町」として評価される景観の礎にもなっている。

○六郷山の成立と２つの耶馬

六郷山の成立には伝説があり、養老２年（718年）に八幡神の応現・仁聞菩薩の活躍によって、国東半島の２８の谷々にそれぞれ寺院をつくり、六万九千躯の仏像がつくられたとされるものである。この伝説は、六郷山のほとんどの寺院に共通して伝えられるものであり、六郷山全体の精神的結合と深いかかわりがあるとされている。

実際の創建については永保元年（1081 年）に宇佐宮弥勒寺に天台宗が流入した後に、六郷山の各霊場に普及したものと考えられている。永保３年（1083 年）の銘がある津波戸山経筒をはじめとして、本市でも有銘の文化財として、長安寺・木造太郎天像（大治５年、1130 年）、同・銅板法華経（保延７年、1141 年）などが残されている。平安時代後期～末期の無銘の仏像は、多くの寺院に今もなお安置されている。

ただし『託宣集』などによれば、国東半島は六郷山寺院群の成立よりも古くから宇佐神宮寺の弥勒寺の僧侶達の修行の場として登場することは忘れてはならない。中でも斉衡２年（855 年）の能行上人の峯入り行の記録は古く、日本最古の峯入りの１つと言える。

六郷山寺院群は寺院の目的ごとに本山（学問）・中山（修行）・末山（布教）と分かれており、天念寺及び無動寺はともに中山の寺院に属する。修行の寺院に相応しく後背には岩山が聳えており、岩屋などの多くの霊場が残されていることから、峯入りの行程の中でも重要な場所であったと考えられる。

天念寺も寺伝には仁聞菩薩開基の寺院とされており、川中不動や小両子岩屋旧在の阿弥陀如来立像（国重文）、県指定の平安仏（釈迦如来・日光月光・勢至菩薩・吉祥天）は仁聞作と伝えられている。現在も天念寺に伝わる修正鬼会についても仁聞創始の伝説があり徹底されている。

実際の天念寺の成立については、あまり多くのことは分かっていない。安貞二年の「六郷山諸勤行幷諸堂役祭目録写（以下、「安貞目録」）」や、建武四年の「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案（以下、「建武注文」）」などの目録類及び江戸初期に成立した「六郷山年代記」の長岩屋堂での供養（建保６年・1218 年）、長岩屋山講堂・権現堂の火災（応永１１年・1404 年）の記事が残されている。

無動寺のあった位置には、六郷山・黒土岩屋の境内があったと推定されている。この「小岩屋」と呼ばれた黒土岩屋は無動寺とは全く別の寺院であり、独立した信仰・寺務を行っていた（下黒土の現・身濯神社）。江戸時代に現在県指定となっている１６躯の仏像群とともに、この地に移動してきたことが分かっており、明治時代の頃には無動寺後背の耶馬は「無動寺耶馬」と呼ばれている。

○「六郷山長岩屋住僧置文案」と中世の六郷山

中世の天念寺周辺を知る上で欠かせない史料が「六郷山長岩屋住僧置文案」である。この古文書は、前半部分（応永２５年・1418 年）と後半部分（永享９年・1437 年）に分かれており、前半部分では屋敷注文と置文の内容、後半部分では置文の内、退転していた夏供米の再興に関わる内容が書かれている。

中世の長岩屋には「住僧」のみが住むことが許され、また「山公事」「夏供米」といった税の納入も「住僧」となるための条件であったことが分かる。屋敷注文によれば、長岩屋境内に６２箇所もの屋敷が集まっていたことが分かっており、それらの地名を付き合わせていけば、現在の長岩屋地区全体が境内地であったことが分かっている。

この「六郷山長岩屋住僧置文案」の詳細な検討と、諸寺院の調査によって、六郷山寺院の多くは坊集落を付近に持っていたことや、坊集落の支配によって仏神事の勤仕を達成していたことが分かっていった。

天念寺には主要な１２の坊があったと伝えられているが、「六郷山長岩屋住僧置文案」には西坊・妙門坊しか登場しないため、その多くが江戸時代程に成立したと考えられていたが、発掘調

査や石造物の精査が進むにつれ、円重坊などの坊跡が中世に遡ることが判明していった。

同じく無動寺周辺・黒土石屋周辺にも坊・屋敷に比定できるような小社小堂・地名が多数残されている。中世の石造物は黒土地区の広い範囲に分布しており、天念寺と同じく往時の寺院の繁栄振りを現代に伝えてくれている。

○三浦梅園と天念寺耶馬

国東市安岐町出身の三浦梅園は、豊後三賢として知られる思想家・自然哲学者であるが、梅園は六郷山寺院、とりわけ両子寺周辺の自然を師として学問を究めたとされている。梅園は国東半島各地の六郷山寺院の風景を賞し、多くの漢詩文を残している。

天念寺には梅園の詩文を刻んだ石鳥居がある。ただし、その鳥居は昭和１６年（1941 年）の水害で流され、バラバラになってしまい、現在では本堂と身濯神社の間に両基礎の部分（現況写真③)、そして平成初頭の河川改修工事の際の発掘調査で発見された一部（現在は身濯神社の前に安置）のみである。この詩文は『梅園詩稿』や古写真（古写真③）より確かめることができる。「維此仙蹤遠自養老　仰夫神徳天門之道　社鼓其鏜盥薦黍稲　有凶斯感誠敬以保」とあり、養老の頃よりこの天念寺耶馬で修行に励んだ行者達の悠久の歴史に対する梅園のイメージを漢詩にしたものである。

天念寺を訪れた梅園の視点からは、天念寺と耶馬が１つの視界の中で捉えられ、それはあたかも庭園で言う「借景」のような価値を持ち始めていたことも示していると考えられる。

第３節　民俗的環境

○地域の伝承

六郷山の成立には仁聞菩薩の開基伝説がある。養老２年（718 年）に八幡神の応現である仁聞菩薩によって、国東半島の２８の谷々にそれぞれ長安寺・天念寺・無動寺などの寺院が開かれ、69,000 躯もの仏像がつくられたとされるものである。六郷山寺院に残る平安仏や大型の仏像のほとんどは仁聞作と伝えられており、天念寺では木造阿弥陀如来立像（重文）と県指定の仏像群、川中不動などが、無動寺でも不動明王・薬師如来・大日如来などの大型の平安仏が仁聞作とされている。

国東半島全体に広まった法会・修正鬼会についても、仁聞菩薩が「鬼会式」６巻を伝えたことで創始されたと伝わり、天念寺における災払鬼は、仁聞菩薩をはじめとする先祖の英霊の化身とされている。災払鬼はその溢れる霊力により、天下泰平・五穀豊穣・無病息災といった、様々な利益とともに、集落に幸福をもたらす存在である。

耶馬中にある無明橋は、古くは別に「無命橋」と書く場合があり、非常に危険な橋・修行場として捉えられている。国東半島では天念寺・無動寺・中山仙境（豊後高田市夷）・津波戸山（杵築市）に見られるこれらの橋には共通して「心に邪があれば落下してしまう」と伝えられている。また、「針の耳」は、岩の狭い隙間を越える難所を指し、英彦山を中心に九州の山岳霊場に広く見られるもので、国東半島では天念寺耶馬（『圖録』にも記載あり）・夕日岩屋（豊後高田市田染小崎）・両子寺（国東市）・津波戸山（杵築市）などで見られる。これらは共通して、心の清らかな者でしか通り過ぎることができないとされる。英彦山の民話では、悪人が通る際、岩が動いて、たちまち押し潰してしまうと伝わる。

○現代に伝わる修正鬼会

現在、天念寺の名を世に知らしめているのは、国東半島最大の法会である修正鬼会である。修正鬼会を執り行う六郷山寺院は、天念寺の他、岩戸寺（国東市）・成仏寺（国東市）であるが、毎年の開催は天念寺のみになっている。

修正鬼会は、修正会と追儺式の鬼追いが融合した国東半島独自の行事であり、伝説には仁聞菩薩によって創始されたとあるが、実際に史料に登場するのは鎌倉時代後期からである。

江戸時代には、国東半島の寺院を西・中・東に分け、組毎に各寺院を巡りながら修正鬼会を行っていたことが分かっており、巡る順序によって現在の開催日が定まっている。西（天念寺）・東（岩戸寺・成仏寺）に分かれ、それぞれ豊後高田市・国東市の寺院に属する住職が集まって仏事を行うことも、この頃の慣わしを踏襲している。

かつては無動寺でも修正鬼会は行われていたことが分かっている。それを示すのが、無動寺に残された鬼会面である。三面ある鬼会面は江戸時代に作られたとされ、現在でも無動寺本堂内に安置されている。国東半島では鬼は幸福をもたらす使者として信仰されており、鬼会面を大切に保管している寺院は多い（市内では３３組の鬼会面が確認されている）。

第４節　社会的環境

現在天念寺耶馬及び無動寺耶馬は、県または市の指定名勝としては保護されていない。天念寺側では本堂・身濯神社・講堂の一帯、及び川中不動・護摩堂跡については県指定史跡として保護されている。無動寺では記念物による指定はなく、文化財保護法に基づく保護はなされていない。文化財以外の保護では国東半島県立公園の一部になっている。

天念寺本堂より東側（元水田）には、天念寺を中心とする長岩屋地区の歴史・文化財をテーマにした資料館「長岩屋伝統文化伝習施設　鬼会の里（以後、「鬼会の里」）」がつくられており、小両子岩屋に旧在した木造阿弥陀如来立像（国指定重要文化財）や、影堂岩屋に旧在した木造千手観音立像などを展示するコーナーと、天念寺で行われる六郷山最大の法会「修正鬼会」を紹介する映像資料を見学できるコーナーなどがある。

また「鬼会の里」は、長岩屋地区の地域活性化に関する活動も行っており、地元の農産品の直売、かんころ餅（乾燥芋で作った餅）などの商品開発などを行っている。

地元住民は、旧暦正月七日に行われる修正鬼会によって強い結びつきがあり、修正鬼会保存会の音頭の下、集落総出で修正鬼会の運営・仏神事の進行を行っている（その運営団体は「そらくちの会」という）。地元の小中一貫校戴星学園の児童・生徒たちも、修正鬼会の際には、お囃子として笛や鼓などの楽器の演奏を披露している。

平成２７年３月に開通した国東半島峯入りロングトレイルのコースの中でも、天念寺耶馬及び無動寺耶馬の岩峰景観やスリルのある峯道のトレッキングコースは目玉として紹介されており、国内外の観光客からの認知度も少しずつ高まってきている。

第５節　これまでの研究

六郷山寺院についての研究は、古くは地域史家で『豊後高田市誌』の編者である酒井富蔵氏によるものがある。『豊後高田市誌』においては、仏像や境内の石造文化財についてまとめられており、天念寺・無動寺の文化財的検討の第一歩であったと考えられる。その後も国東半島の寺院研究は長い間地域史家によるものが主であった。

国東半島における寺院研究が大きく進展するのは、昭和５６年に開館した大分県立風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）の、国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査によってのことである。『豊後国田染荘の調査』にはじまった当調査の主な対象は、圃場整備の憂き目に遭わんとしていた荘園村落遺跡に加え、六郷山をはじめとする九州最古級の仏教文化であり、その第２弾であった『豊後国都甲荘の調査』で、天念寺周辺の石造文化財や、新たに発見された「土谷朋夫氏所蔵文書（現在は大分県立歴史博物館に寄託）」所収の「六郷山長岩屋住僧置文案」の検討によって、室町時代の天念寺伽藍が谷全体に広がり、境内に住むことを許された「住僧」たちの生活・信仰の姿に深い理解が加わった。この際に天念寺後背の岩屋の踏査も行われ、荘園調査のベースマップであった森林基本図上にその位置が落とされた。

真玉地区における本格的な荘園村落分布調査は、現在にいたるまでなされていないが、無動寺に関する調査は大分県立歴史博物館『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』によってなされている。霊場の位置と、古文書に見える四至の記述から、現無動寺の位置に黒土石屋（本松房）があり、小岩屋山無動寺は下黒土身濯神社に位置したことや、黒土石屋及び旧無動寺境内における霊場の存在が明らかにされた。

平成２５～２７年度に行われた大分県名勝分布調査では、天念寺及び黒土谷（無動寺）における耶馬の人文的評価についての調査がなされ、天念寺に関しては三浦梅園の詩文を刻んだ鳥居があり、それが梅園の六郷山への高い関心や歴史観を示していることがわかった。また、昭和４年（1929 年）に種田山頭火が国東半島を訪ね、両子寺・天念寺・椿堂の岩山を越える旅の中で、「岩山の景勝」「小耶馬渓とでもいひたい」と高く評価をしていたことが分かった。椿堂は無動寺のすぐ西側に位置する真言宗の霊場で、山頭火の行程の中で無動寺についても景勝として捉えられていた可能性が高いという事が指摘された。また、名勝地を活用する際の手法として、外から名勝を観るだけではなく、実際に耶馬に登り名勝で（景色を）観ることや、神仏習合の文化や長い歴史を名勝に観ることが重要であると指摘された。

平成２５～２７年度には豊後高田市でも、六郷満山寺院群詳細調査事業（大分県文化財魅力度アップ事業採択）が行われ、六郷山寺院における詳細な現況調査が行われた。天念寺・無動寺の項目では、修行の耶馬についても悉皆調査を行っており、現段階における各霊場の保存状況、またそこから見える今後の六郷山寺院群の保護・活用における課題などを整理した。平成２７年度末には『六郷満山寺院群詳細調査報告書』を刊行した。

第２章　天念寺耶馬及び無動寺耶馬の概要

第１節　天念寺耶馬及び無動寺耶馬の風致景観の歴史的変遷

天念寺耶馬の景観の歴史的変遷は、寛延４年（1751 年）に作成された『天念寺由緒書』の記述や、『圖録』及び古写真との比較によって把握できる。

特に天念寺は昭和１６年の三畑ダム決壊に端を発する大水害の被害を受けており、本堂・鐘楼・鳥居・車橋・石造仁王・護摩堂・巨椋の木・国東塔などが流出している（古写真②～⑤）。その他多数の石造物も犠牲になったと思われるが、被害の詳細は不明である。

昭和１６年の水害の後、本堂は木造阿弥陀如来立像を埼玉県の鳥居観音に売却した金銭によって再興されたが、絵図や古写真にあるような書院・庫裡を備える大きなものではなく（古写真⑤）、県指定の仏像を安置するために必要なほどの小さな造りになっている。現在の天念寺本堂脇の駐車場の区画まで庫裡が伸びていたという。現在ではセメント瓦によって屋根が葺かれている。

身濯神社・講堂については、一段高い場所にあったことが幸いして、洪水の影響を受けなかった。身濯神社拝殿は古写真より洪水の頃はまだ茅葺であったことが分かるが、現在では瓦葺になっている。

現在、長岩屋川を渡している橋は、身濯神社の前にあるが、『圖録』や古写真によれば洪水の被害を受ける前の車橋は講堂の前にあった。車橋は八幡神社などによく見られる六角形の親柱を備え、講堂から見て川向いに、石造仁王、大鳥居があった。大鳥居については、三浦梅園の撰詩文が刻まれており、根元部分の残欠が本堂と身濯神社の間に残されている他、平成元年の河川改修の時に上部の一部が出土しており、現在身濯神社の近くに安置されている。

大鳥居の付近には護摩堂・舞台があったとされ、護摩堂跡は県史跡にもなっているが、建物としては残っていない。

次に耶馬の中における堂宇についてであるが、『天念寺由緒書』『圖録』に見える各岩屋の堂宇は長年風雨に晒されたことによってほとんど壊れてしまっている。

三間幅の堂宇があり、中に木造阿弥陀如来立像を安置していた小両子岩屋の覆屋は、仏像を搬出した後にその役目を終え、残された石仏を保護するのに十分な小さな覆屋が再建されている。木造阿弥陀如来立像と同じく、鬼会の里に展示されている木造千手観音立像が旧在した影堂岩屋は、『豊後国都甲荘の調査』の調査が入ったときには、堂宇が朽ち果てていたため、仏像を救出し、堂宇は解体した。多くの石仏を安置する龍門岩屋については、『圖録』と現在の状況を比較してみると分かるが、覆屋が左右に分かれている形状をしており、近年ではほとんど変化していないことが分かる。

『圖録』には無明橋が見られないが、現在のアーチ状の無明橋は大正年間につくられたもので、少し前にできた木製無明橋が危険であったためにつくられたものとされる。それ以前は無明橋がなく、天念寺側から見て裏手からよじ登る峯道があったといわれる。

天念寺の景観を大きく変容させた要素として、昭和１６年の水害がある。昭和１６年９月３０日から翌１０月１日にかけて降った大雨により、三畑ダムが決壊し、その河流域にあった長岩屋地区から高田市街地までの全域で大水害が発生した。とりわけ長岩屋地区の被害は甚大で、川沿いに並んでいた天念寺堂宇（本堂・鐘楼・護摩堂など）、石造物（鳥居・仁王など）は流されてし

まった。また、水害による金銭的損害を埋め合わせるために、木造阿弥陀如来立像などの文化財を売却し（本堂再建のため）、天念寺の景観は大きく変貌する事になる。その後は、多くの仏像群は本堂で指定文化財として保護され、修正鬼会は脈々として受け継がれてきた。木造阿弥陀如来立像も平成に入って豊後高田市によって「鬼会の里」に買い戻された。

第２節　主要な構成要素

〇範囲全体

長岩屋地区から黒土地区にかけては、国東半島の中でも「耶馬」が集中している地域である。中世には、天念寺は長岩屋、現無動寺は黒土岩屋と呼ばれた寺院であり、耶馬中の岩屋を中心に寺院が形成されてきた。天念寺耶馬に造られた峯道は、多くの岩屋を巡りながら無動寺へと通じる道であり、無明橋などが所在する尾根上からは無動寺耶馬がよく見える。また、無動寺耶馬に造られた峯道は椿堂・旧無動寺・応暦寺と続いていくが、途中に造られた無明橋・石祠は天念寺側を向いており、無明橋から無明橋を望むことができる。また、両者を六郷山惣山・屋山から見れば殆ど一体であるように見え、両者の関係が地理的に緊密であったことが分かる。

〇天念寺付近

【講堂（現況写真①）】

現在の天念寺伽藍の最西部に位置する堂宇で、修正鬼会の舞台として知られている。横に長い岩屋の中に堂宇があり、杉皮の上に茅を葺いた屋根は後背の岩屋にくっつくように造られている。嘉永６年（1853 年）の峯入りに関する墨書が柱に残されており、それ以前の建築であると推定される。岩屋には薬師如来像が本尊として祀られている。

六郷山寺院では、仏事を行う講堂が重要視された寺院が多く、天念寺も同様に境内では大型の堂宇である。

【身濯神社（現況写真②）】

講堂の東隣に一体となって存在している。保存されている棟札から本殿は文政１１年（1828 年）、拝殿は嘉永６年（1853 年）頃に建てられたことが分かっている。講堂のすぐ横に並んで建っており、六郷山寺院の中でも神仏習合の姿を今に伝える好例である。『六郷山年代記』の応永１１年（1404 年）の項目には、講堂と権現社が火災で焼失した記事があり、当時から両者は隣に建っていたと推定できる。

【本堂及び庫裡（現況写真④）】

本堂及び庫裡は昭和１６年の水害によって流された後、木造阿弥陀如来立像を売却した資金によって昭和３６年に再建されたが、当時のものと比べるとかなり小規模化した。現在は県指定文化財の木造釈迦如来坐像・木造日光菩薩立像・木造月光菩薩立像・木造吉祥天立像が安置されている。木造勢至菩薩立像は、鬼会の里へ移動して展示されている。

【川中不動（現況写真⑤）】

天念寺伽藍の前に流れる長岩屋川の中の巨岩に彫り込まれた磨崖仏であり、不動明王（中央）及び矜羯羅童子（右）・制吒迦童子（左）の不動三尊で構成されている。『圖録』や地元の伝承で

は仁聞作とされているが、実際は室町時代頃につくられたと推定されている。
河川中につくられた理由としては、暴れ川であった長岩屋川を鎮めるためであるとされている。
平成２４年の修理の際に、岩の頂点付近に経塚が２ヶ所設けられていたことが判明し、円形に彫り込められた孔からは、経筒の破片が多数発見された。磨崖仏が彫り込まれる遥か昔から、この岩が信仰の対象であったことが判明したのである。

【小両子岩屋（現況写真⑦）】
南北朝時代の六郷山寺院のリストである「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案（以下、建武の注文）」の中で、長岩屋の末寺とされている岩屋である。
「天念寺由緒書」には「弐間四方堂壱宇　本尊阿弥陀如来」とあり、現在鬼会の里に展示されている木造阿弥陀如来立像（国重文）が旧在した岩屋である。天念寺耶馬の中では大型の岩屋が、左右に二ヶ所連なっており、無数の石仏（江戸中期以降）が安置されている。
向かって左側の岩屋には加工痕（屋根の跡）や、前提部の礎石が見られる。現在の堂宇は近年建てられたもので、弘法大師が安置されている。

【龍門岩屋（現況写真⑬）】
小両子岩屋と同じく建武の注文で長岩屋の末寺とされている岩屋である。
「天念寺由緒書」には「三間ニ壱間　本尊観世音其外諸仏数多」と記され、屋根部が横に繋がった特徴的な堂宇は、明治３１年の銅版画に見える「龍門窟」の形状を踏襲している。堂宇の先には加工がなされた岩屋があり、観音菩薩等の多数の石仏が並べられている。

【無明橋（現況写真⑭）】
天念寺耶馬の峯上の霊場を繋ぐアーチ型石橋で、天念寺耶馬のシンボル的な存在でもある。絶壁を繋いでおり下との高低差は100m超である。
現在の無明橋は大正時代に造られたことは分かっているが、造橋に関する詳しい資史料は残っていない。造られた経緯としては、造橋以前にあった木製の橋が危険であったからとされている。明治３１年の銅版画には橋が見えないため、木製の橋についてもそこまで遡られないと考えられる。地元からの聞き取りによれば、造橋以前は岩をよじ登るルートがあったらしいが、現在ではそのルートを確かめることは難しい。
無明橋は無命橋と標記されることもある危険な橋で、邪な心を持つ者、仏への信心がない者が渡ろうとすると下に落ちてしまうという。

〇無動寺付近
【本堂（現況写真⑯）】
無動寺は本堂に県指定有形文化財の仏像が十六躯（本尊は木造不動明王坐像、他に木造大日如来坐像、木造薬師如来坐像、木造薬師如来坐像附十二神将）が安置されている。
無動寺は元々、下黒土・身濯神社にあったとされ、現地には多くの石塔・板碑や磨崖宝塔・磨崖種字など、石造文化財に溢れている。現無動寺の位置には六郷山寺院・黒土石屋があったと推定されており、かなり大型で古い宝篋印塔の部材をはじめとする中世石造物が散見される。

【身濯神社（現況写真⑰）】

無動寺の身濯神社は、寺院に隣接する鳥居を始点とする参道の先にある。石段を少し登れば拝殿・本殿に到着する。神社の奥に無動寺耶馬へ登る峯道の入口がある。

【一号岩屋（現況写真⑱）】

身濯神社より少し登った場所にある岩屋で、少し道を逸れて、岩に寄り付きながら進む道の先に位置する。風雨に晒されながらも、木造の堂宇が残っており、中には不動明王の石仏が安置される。

【無明橋（現況写真⑲）】

無動寺耶馬の無明橋は、四枚の棒状の岩を組み合わせて架ける桁橋で、構造はかなり単純である。岩の突端にある石祠（豊後四国八十八箇所霊場の一つになっており、弘法大師が祀られる）に向かうために渡らなくてはならない。

天念寺側の耶馬を見渡すことに適した位置にあり、無動寺前からでは確認できない天念寺無明橋を見る視点場でもある。

〇岩屋間の峯道

天念寺の御山には幾つも岩屋が存在し、それぞれが峯道と呼ばれる細い道によって結ばれている。無明橋の他にも、鎖を掴みながら登る「鎖場」、岩と岩の細い隙間を抜ける「針の耳」などの難所がある。

殆どの峯道は寺院側からは目視で確認することはできないが、『圖録』では明治時代の頃の峯道の位置をおおよそ知ることができる。現在の峯道と最も違う部分は岩屋同士を横につなぐ道が少ない点であり、龍門窟（龍門岩屋）は他の岩屋から独立しているように描かれている。『圖録』では無明橋とその先の石祠も描かれておらず、明治時代末から大正時代にかけて岩屋同士を横につなぐ峯道が発達してきたと考えられる。

峯道上の石造物を見てみると、尾根上に残された宝篋印塔・国東塔・五輪塔などから中世の頃から、石造物を使った供養が盛んに行われてきた様子をうかがい知ることができる。

〇周辺の景観

天念寺耶馬及び無動寺耶馬の周辺は、中世には坊集落として発展し、近世には農村に変化していった場所が多い。基本的には直下の農村及び隣の峰々が見える場合が多い。

天念寺耶馬直下には南側に長岩屋地区、北側には黒土地区が見える。都甲地区は並石地区の鬼城耶馬（瀬戸内海国立公園の一部）まで耶馬景観が広がっており、南側には連綿とした岩峰・岩柱が見える。また南側には長安寺のある屋山も聳えている。北側には無動寺耶馬が大きく見え、黒土谷の耶馬がよく見える（周辺写真①）。

無動寺耶馬では無明橋のある突端からは主に南側がよく見え、直下には農村が広がる。また、天念寺耶馬が見渡せ、無明橋の姿を拝むことができる。さらに、天念寺耶馬と鬼城耶馬の景観が混ざり合うように見え、岩柱・岩壁の連続を見ることができる。

耶馬の頂上からは、西側の地区がよく見える。無動寺の西側は２筋に分かれており、上黒土（先に小河内）と三畑の集落が広がっている。どちらの地域も圃場整備が行われていない地区であり、

やや遠くからではあるが、上空からその美田の姿を確かめることができる（周辺写真②)。

天念寺耶馬と無動寺耶馬は、直線距離では 700 メートルほどしか離れておらず、互いの耶馬上が絶好の視点場となっている。また、長安寺のある屋山の頂上から耶馬を見れば、天念寺耶馬及び無動寺耶馬はほとんど一体のものに見え、両者の地理的・有機的繋がりを感じることができる（周辺写真③)。

第３節　まとめ

天念寺耶馬及び無動寺耶馬は、六郷山の中でも修行の寺院であった中山本寺にあたる天念寺・無動寺の後背に聳える岩山景観である。これらの岩山は、現中津市などに位置する名勝・耶馬渓に似た景観として、近代初頭に「●●耶馬」と名付けられた景勝地であり、寺院・耶馬が１つの景色に捉えられる様は「借景」にも似た景観美を持っている。

この２ヶ寺は直線で 700 メートルしか離れておらず、互いの耶馬の上は、互いの耶馬の視点場になっている。国東半島・六郷山には古代から続く峯入り・峯道が現代にも伝わっており、峯道を越えることでその有機的繋がりを体感することができる。

天念寺耶馬及び無動寺耶馬の境内地には、多くの霊場が残されており、中世の石造物も散見できる。また、六郷山長岩屋住僧等置文案、天念寺由緒書などの検討により、中世・近世からの歴史的景観を引き継いでいる場所が多く残されていることが分かっている。更には明治３１年の『圖録』所収の銅版画や古写真の検討によって、昭和十六年の水害で流された本堂付近の様子が詳細に判明する場所もある事がわかった。

江戸時代には三浦梅園によって天念寺耶馬の名勝地としての価値が見出された。天念寺耶馬中の峯道を、養老２年より行者達が歩いてきた「天門之道」と表現し、悠久の歴史と、神仏や行者たちへの畏敬の念が感じ取れる詩文が鳥居に刻まれており、その一部が現在も境内地に残されていた。

近代に入ると、国東半島各地の耶馬に名勝地的価値が加えられ「●●耶馬」と呼ばれる場所が増えていくが、無動寺後背の耶馬については、種田山頭火の書翰によって「小耶馬渓とでもいひたい山間」との評価がなされ、『西国東郡誌』でも「奇勝中の奇、絶景中の景」と表現され、高い評価を受けていた事がわかった。

第３章　天念寺耶馬及び無動寺耶馬と豊後高田市

第１節　名勝としての天念寺耶馬及び無動寺耶馬の意味

六郷山寺院に関する文化財指定は、国宝指定がなされている富貴寺大堂や、真木大堂・熊野磨崖仏・長安寺・天念寺などの仏像など、有形文化財が中心であったが、近年では「田染荘小崎の農村景観（六郷山の岩屋を含む）」の重要文化的景観選定（平成２２年）、「富貴寺境内」の史跡指定（平成２５年）など、記念物としての評価が高まってきている。今回の名勝指定により、六郷山寺院の価値付け、保護及び活用の方向性がより深みを帯びてくる。

豊後高田市は国東半島の西半分に位置し、山間部には多くの耶馬地形を有している。それらには古代より弥勒寺系の僧侶や修験者の格好の修行の場として見出された場所が多く、市内には六郷山寺院の中でも修行の寺院とされる中山寺院が多く分布する。歴史的に見ればこの耶馬と六郷山寺院は切り離せない関係にあるが、従来の保護される範囲（県史跡による）は、天念寺では堂宇と磨崖仏の限られた範囲、無動寺にいたっては保護の措置がなされていない。名勝に指定されることで、耶馬の広い領域を保護することができ、「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」の歴史的風致の維持向上に繋がると考えられる。

活用の面で言えば、１０年に１度程度行われる峯入り行は、斉衡２年（855 年）に創始されたとされる日本最古のものであり、行者がよじ登る天念寺の岩峰や、岩場間を渡す無明橋は、最大の見せ場として人気が高い。平成２６年には「国東半島峯道ロングトレイル」のコースが全て開通し（豊後高田市では４コース）、六郷山寺院と耶馬は豊後高田市観光の目玉の一つとなっている。「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」が名勝指定されることで、両寺院・両耶馬の関係性がより際立つことになり、六郷山寺院の回遊性も高まると考えられる。

豊後高田市内の耶馬の景勝地としての歴史は古く、大正１２年に編纂された地域初の地誌『西国東郡誌』の中で、夷・無動寺・天念寺・田染上野などが「奇勝」として取り上げられ、現在においても住民に耶馬景観の価値が浸透している。

天念寺耶馬において、無明橋・川中不動は全国規模の知名度があり、市・県のアイデンティティを形成する要素となっているだけではなく、その特色ある風景は日本の古代中世山岳仏教の姿を今に伝えており、訪れる者を惹きつけてやまない。また、無動寺耶馬についても、岩壁景観の迫力が人気であり、古くから大分県を代表する奇勝として親しまれている。

耶馬が名勝指定をされれば、耶馬景観の名勝的価値がより多くの人々に伝わり、より一層愛される景観になると考えられる。

第２節　長岩屋伝統文化伝習施設「鬼会の里歴史資料館」の役割

鬼会の里歴史資料館は、小両子岩屋に旧在した木造阿弥陀如来立像（国指定重文文化財）を、平成１５年に豊後高田市で買い戻した際に、収蔵庫兼ガイダンス施設として整備したものである。

現在館内で展示されているのは、木造阿弥陀如来立像に加え、木造勢至菩薩立像（県指定有形文化財）、木造千手観音立像（影堂岩屋旧在）、天念寺大般若経の一部（市指定有形文化財）、出土遺物（鬼会の里を建設する際の発掘調査で発見された中世の土器類、川中不動上部の孔から発見された経筒など）、修正鬼会の映像資料、修正鬼会で使用する道具である。六郷山寺院や市内文化財についてもパネル展示がなされており、六郷山寺院のガイダンス施設が乏しい本市にとって、

六郷山寺院観光の中心的な拠点となっている。

第３節　保存活用について

天念寺耶馬及び無動寺耶馬の保存活用については、指定後に保存活用計画の策定を行う（各構成要素の保護に係る詳細な現況確認、修景事業に必要な情報のまとめ、活用に資する設備に関する情報収集（登山道、視点場など））が挙げられる。

その後、保護の部分に関しては、修景事業に取り組み、岩肌がよく見えていた昭和中期以前の状態に耶馬景観を可能な限り近づける作業を行う。また、昭和１６年の水害の結果失われた景観（三浦梅園詩文鳥居、石造仁王など）及び経年による小規模堂宇（龍門岩屋堂宇、無動寺１号岩屋など）の補修を順次検討していく必要がある。

活用に係る事業としては、シンポジウムによって市内外の人々への周知を行う他、ロングトレイル関連のモニターツアー、地域の行事である「鬼会の里祭り」「修正鬼会」でのＰＲを行っていく予定にしている。パンフレット作成・ホームページでの情報公開に関しては、平成２８年夏に耶馬のフォトコンテストを開催しており、優秀作品を上手く活用した広報を行っていきたい。

調査対象となった耶馬の内、県指定名勝となっている夷谷においては、「一路一景公園」という耶馬を見るための展望場が設けられており、中山仙境とよばれる峯道には登山道が整備されているなど、既に耶馬を活用した観光が推進されている。今回の調査によって、夷耶馬における文化的価値・景勝地的価値や六郷山寺院との関係性が一層際立ち、耶馬を素材とした観光誘客がより強化できる。

天念寺耶馬については、「御山」と呼ばれる耶馬につくられた修行場（岩屋・無明橋）がトレッキングの素材として人気があるが、景勝地的価値については三浦梅園の鳥居銘文の説明看板を設置するにとどまっている。今回の調査によって、天念寺耶馬は『大分縣社寺名勝圖録』の銅版画に描かれた風景を素材にして、景勝地的価値が詳細に説明できるようになった。天念寺耶馬は史跡的価値ともリンクする場所が豊富であり、観光客にとって六郷山寺院と耶馬というテーマがイメージしやすい場所であると考えられる。

次回の峯入りが平成３０年に開かれる予定になっており、峯道・修行の耶馬に関連が深い天念寺耶馬及び無動寺耶馬のよいＰＲの場になると考えている。

また、地域間連携として、耶馬景観が多く残る地域、県内では名勝耶馬渓のある自治体、群馬県の妙義山・荒船山、鳥取県の三徳山などとの交流事業を進め、交流シンポジウムなどのイベントを開催していきたい。

以下に、天念寺耶馬及び無動寺耶馬における保存活用を考える上での課題を整理しておく。

①視点場の確保	修景事業（樹木の剪定など）
②視点の再現	構成要素の復元（梅園詩文の鳥居など）
	耶馬に登れない人への配慮（映像・模型）
③峯道・霊場の安全確保	峯道の定期メンテナンス（鎖・足場）
	岩屋・石造文化財・建築の補修（落下防止）
④周知広報	シンポジウム・バスツアーなど市民向けのイベント
	本市・商工観光課との連携による市外へのプロモーション
⑤管理団体の設定	組織運営の強化

参考文献

上田延成編著『大分縣社寺名勝圖録（復刻版）』（1983 年、青潮社）

大分県『国東半島県立自然公園　自然環境学術調査報告書』（2009 年）

大分県自然環境学術調査会野生生物専門部会編『レッドデータブックおおいた～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～』、2001 年）

大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国都甲荘の調査』（1993 年）

大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』（1994 年）

酒井富蔵編『豊後高田市誌』（1957 年）

西国東郡編『西国東郡誌』（1923 年、高田町）

文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）』（2016 年）

豊後高田市『六郷満山寺院群詳細調査事業報告書』（2016 年）

豊後高田市『豊後高田市史特論編　くにさきの世界―くらしと祈りの原風景―』（1996 年）

豊後高田市『豊後高田市史』（1998 年）

真玉町誌刊行会編『真玉町誌』（1978 年）

松本達郎・野田光雄・宮久三千年『日本地方地質誌　九州地方』（1962 年、朝倉書店）

参考史料

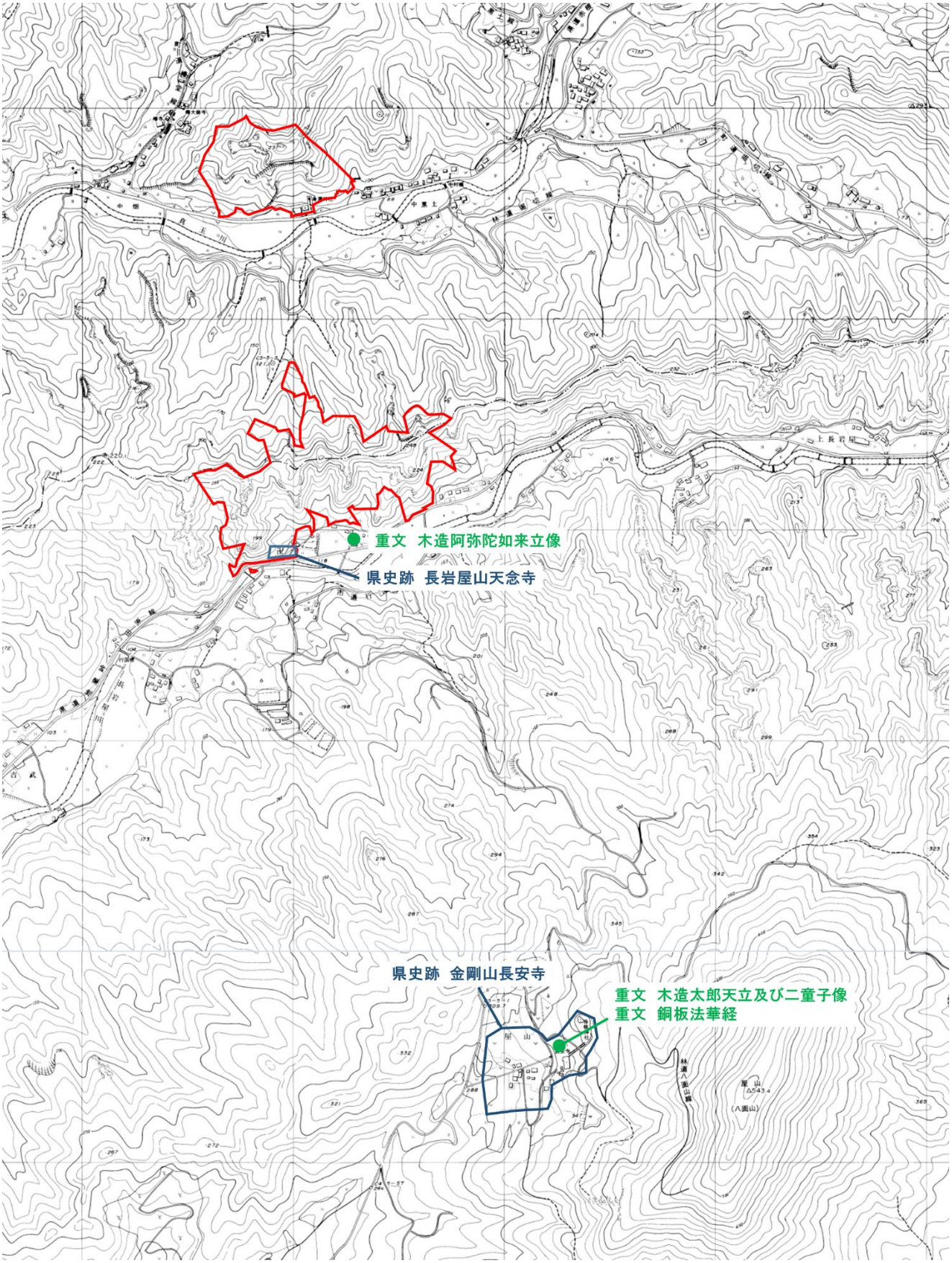
長岩屋山天念寺境内図（『大分縣社寺名勝圖録』より）

六郷山長岩屋住僧置文案（土谷朋夫氏所蔵文書より）

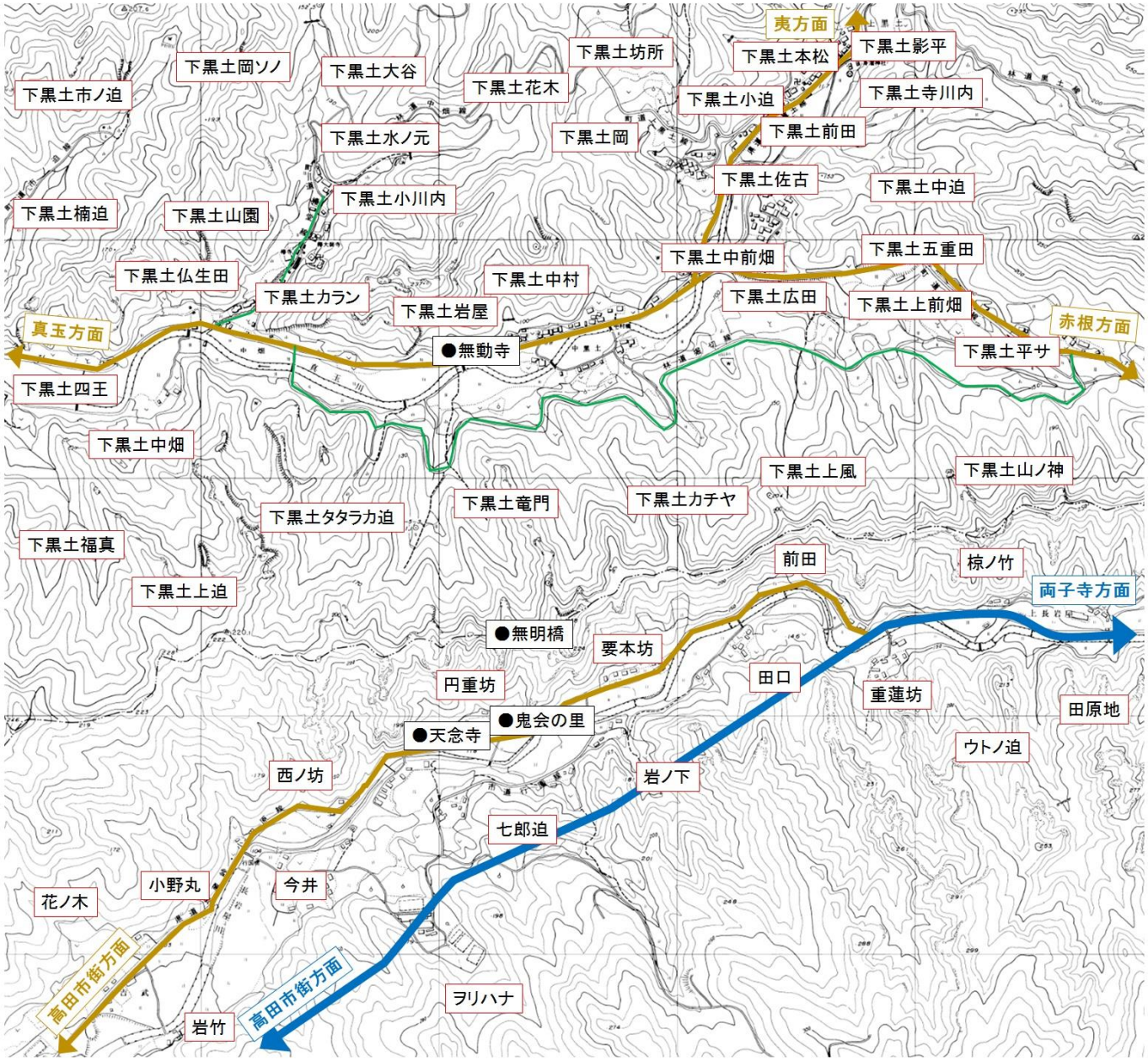
六郷山年代記（長安寺所蔵）

資料編

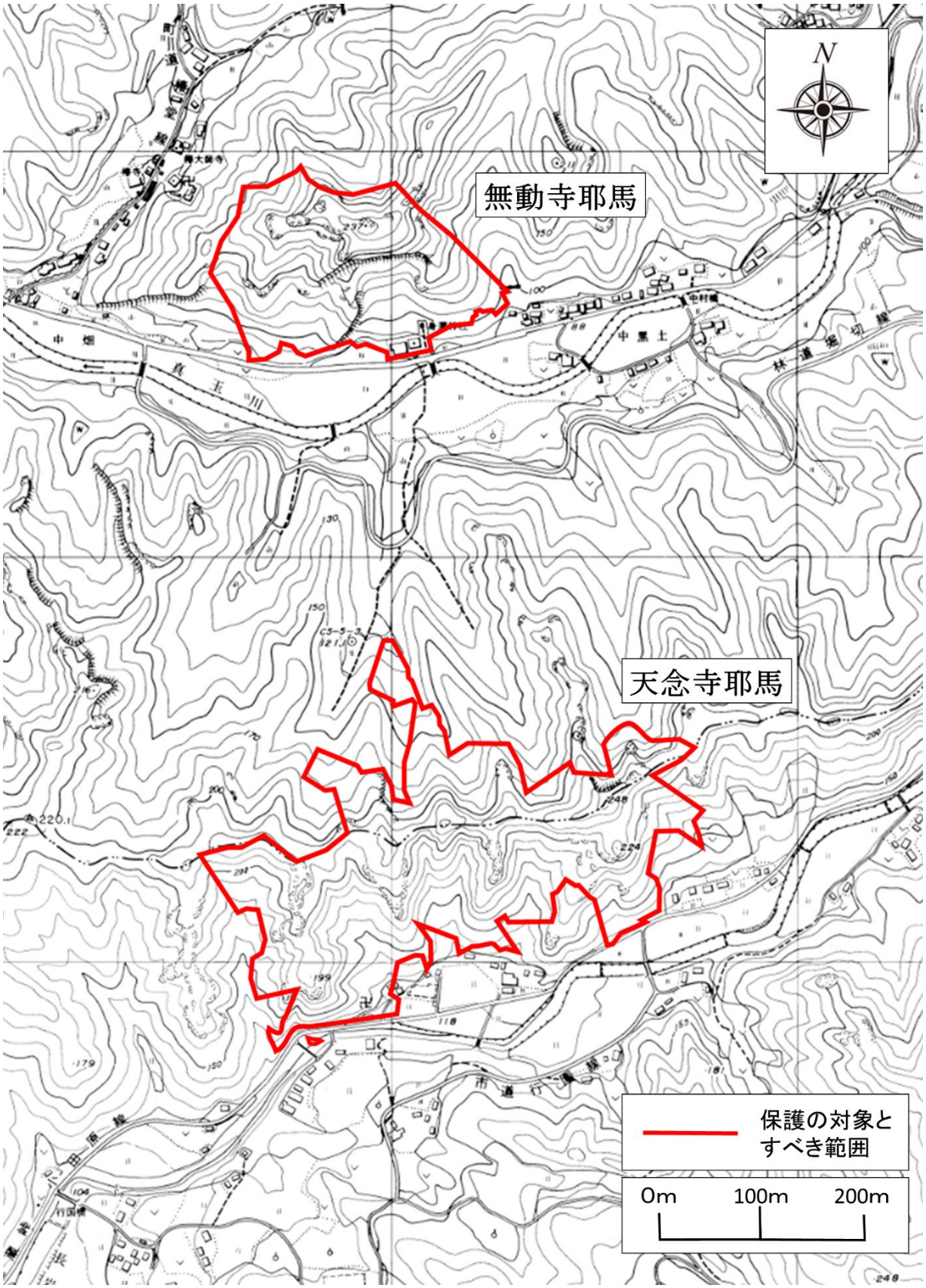
①天念寺耶馬及び無動寺耶馬　周辺文化財



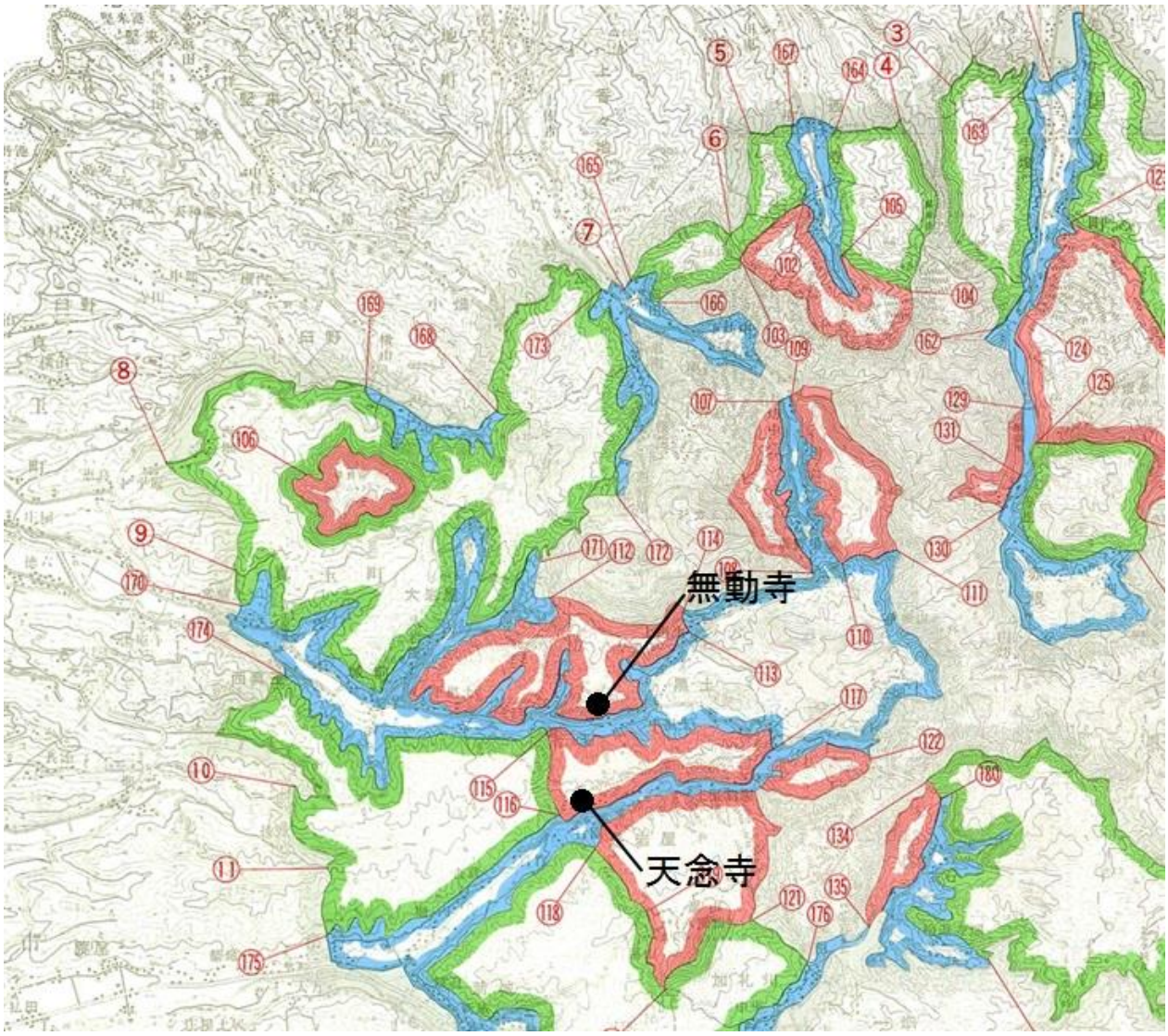
②長岩屋地区及び黒土地区小字図



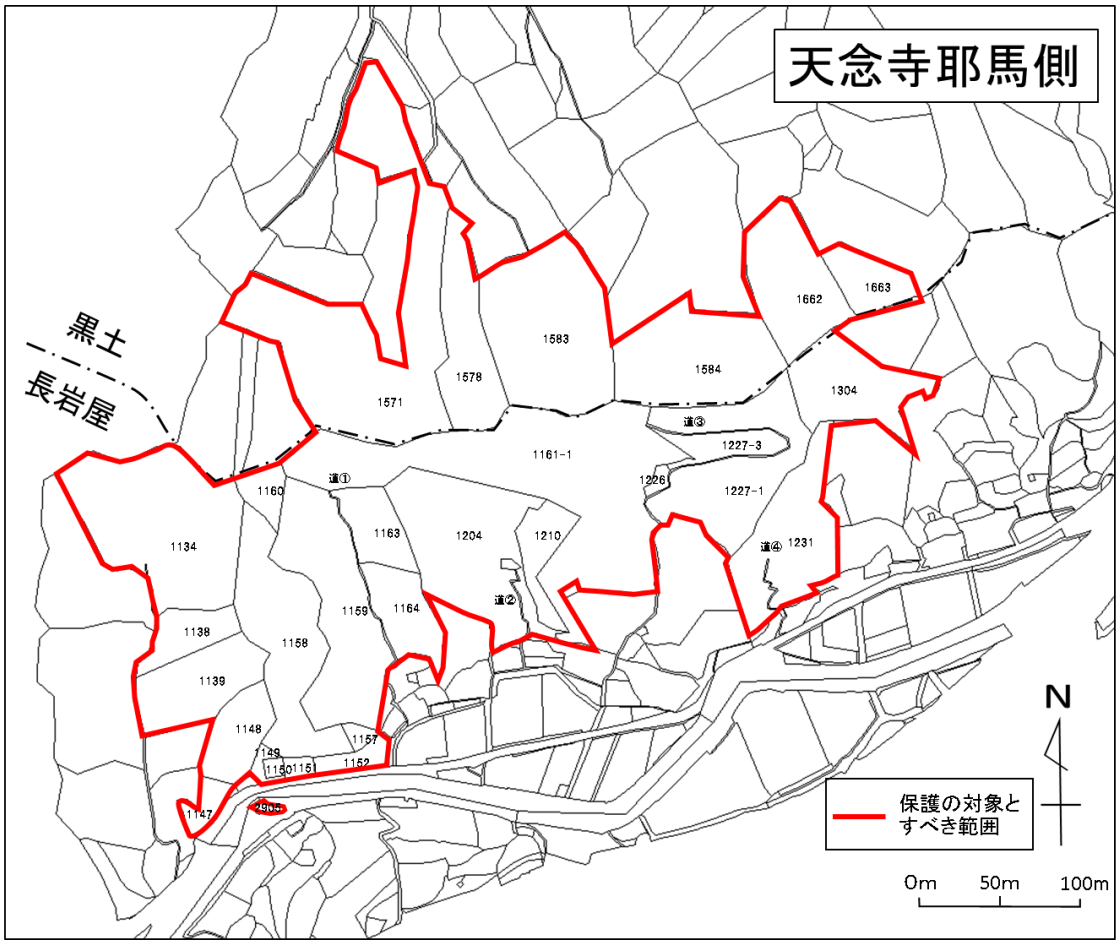
③天念寺耶馬及び無動寺耶馬　範囲図

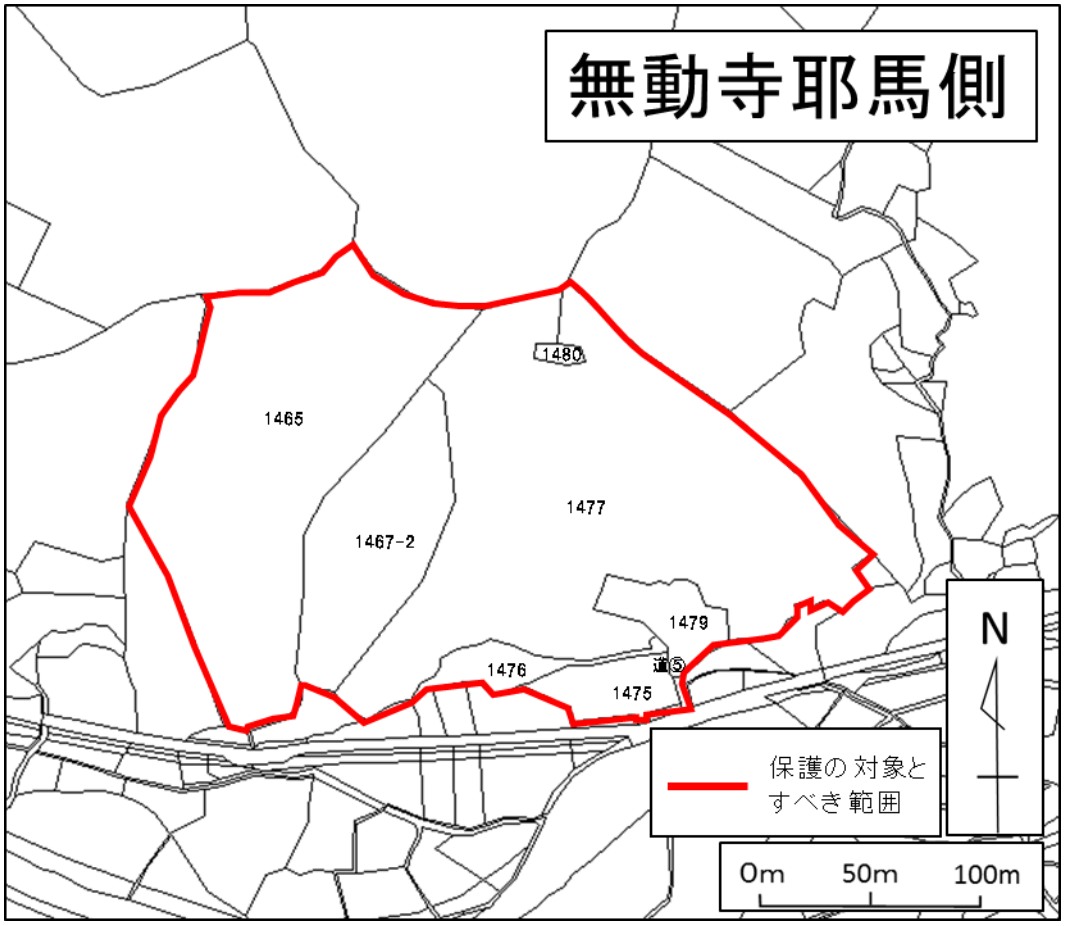


④国東半島県立公園範囲図（該当地区抜粋）

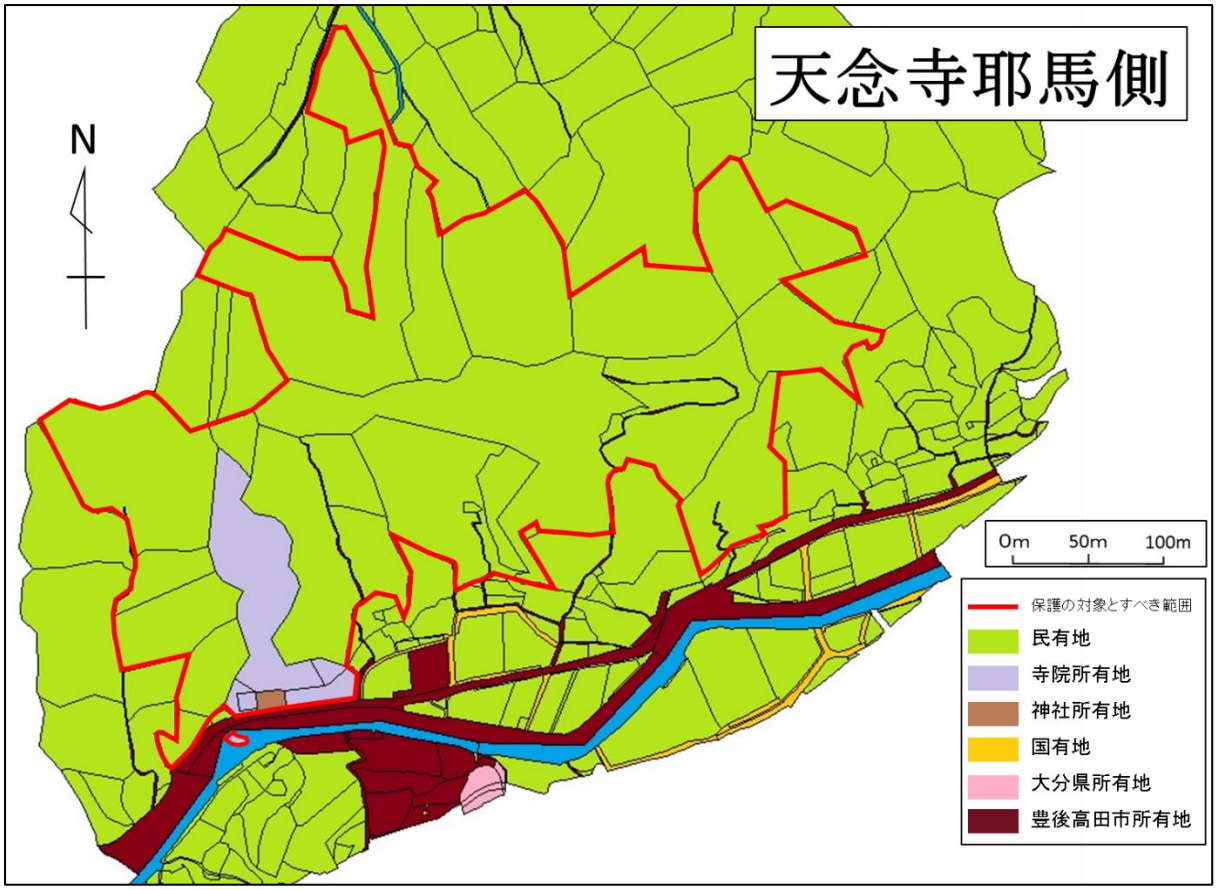


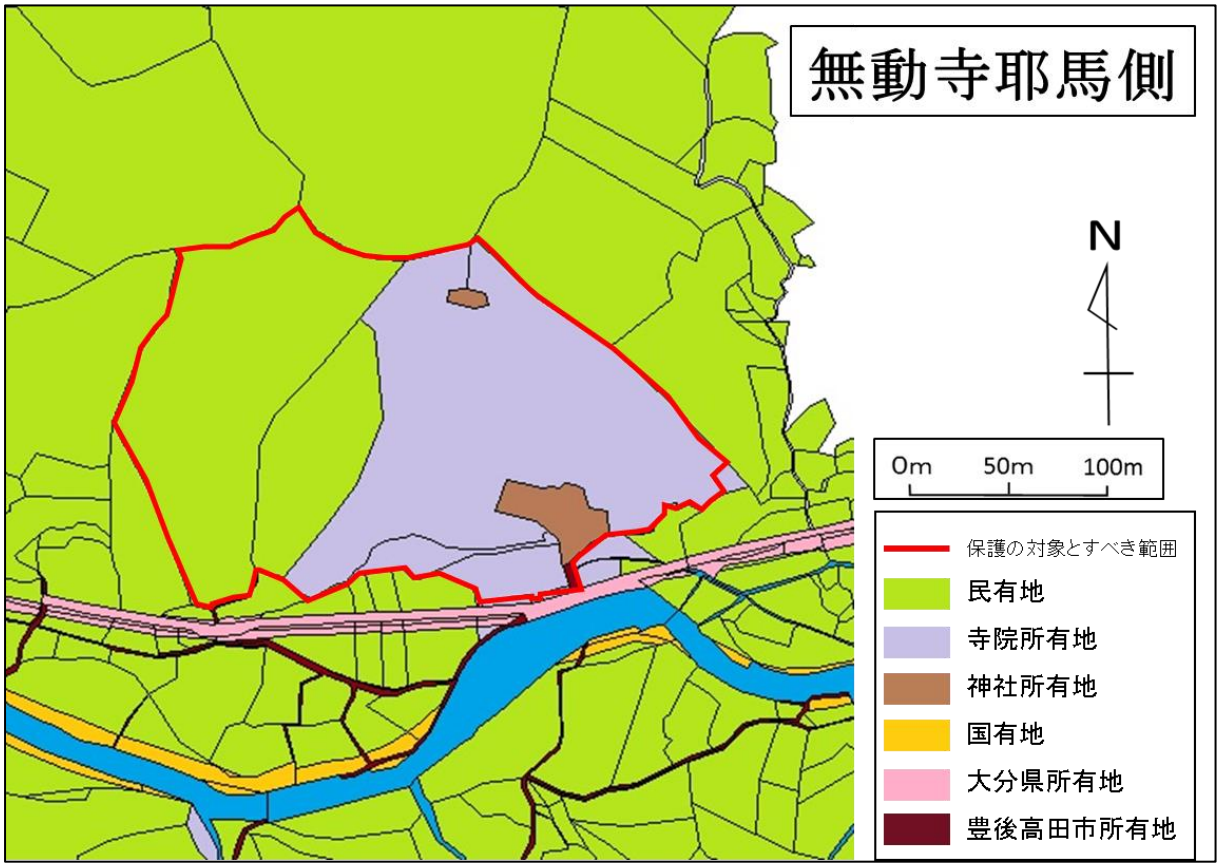
⑤字図


天念寺耶馬側
黒土
長岩屋
1663
1662
1583
1584
1578
1571
1304
道③
1227-3
1161-1
1226
1227-1
道①
1160
1163
1204
1210
道④
1231
1134
道②
1159
1164
1138
1158
1139
1148
1157
1149
1150
1151
1152
1147
2505
N
保護の対象と
すべき範囲
0m
50m
100m

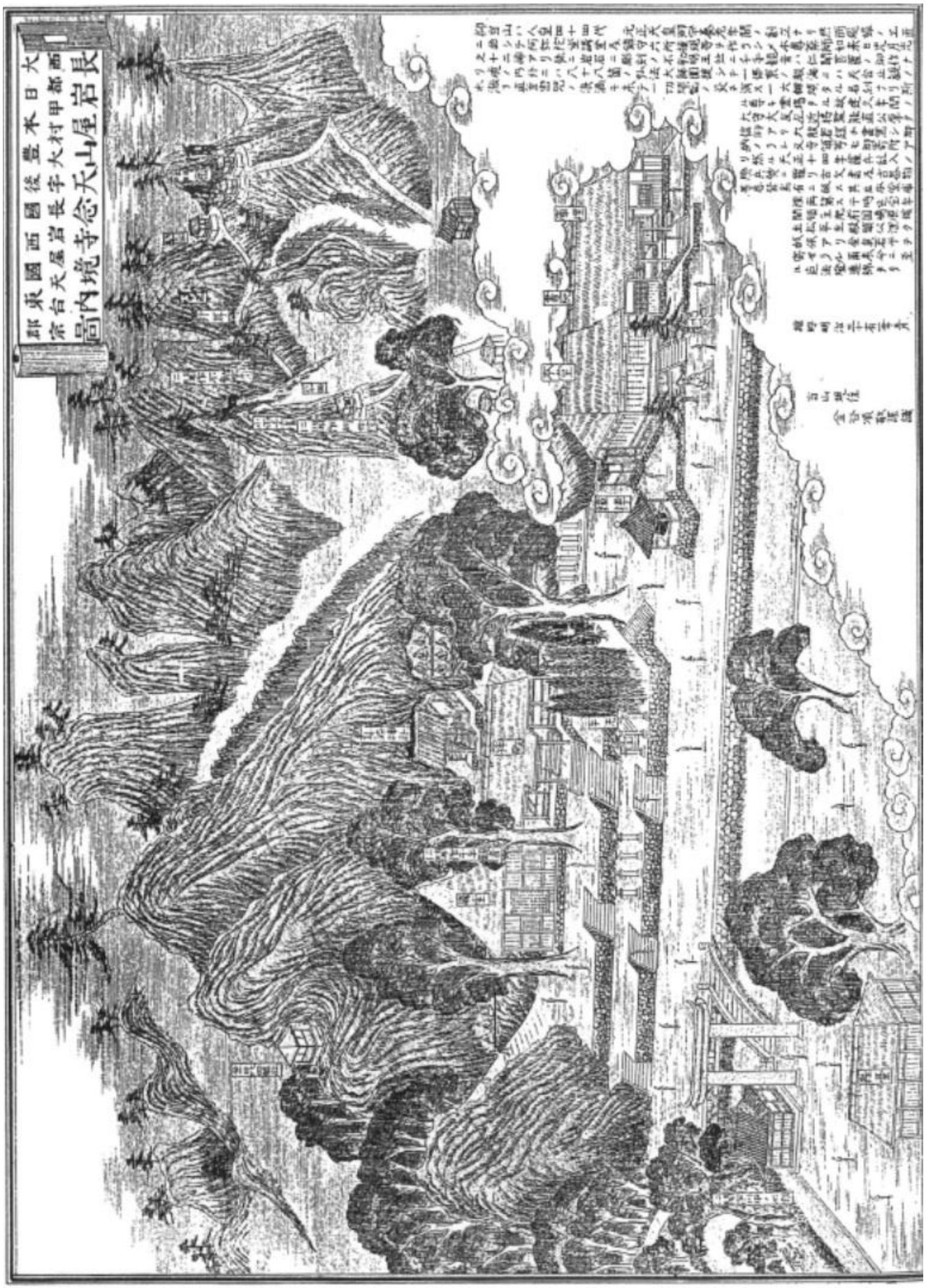

無動寺耶馬側
1480
1465
1477
1467-2
1479
1476
道⑤
1475
N
保護の対象と
すべき範囲
0m
50m
100m

⑥字図（所有者別）


天念寺耶馬側
N
0m
50m
100m
保護の対象とすべき範囲
民有地
寺院所有地
神社所有地
国有地
大分県所有地
豊後高田市所有地


無動寺耶馬側
N
0m
50m
100m
保護の対象とすべき範囲
民有地
寺院所有地
神社所有地
国有地
大分県所有地
豊後高田市所有地

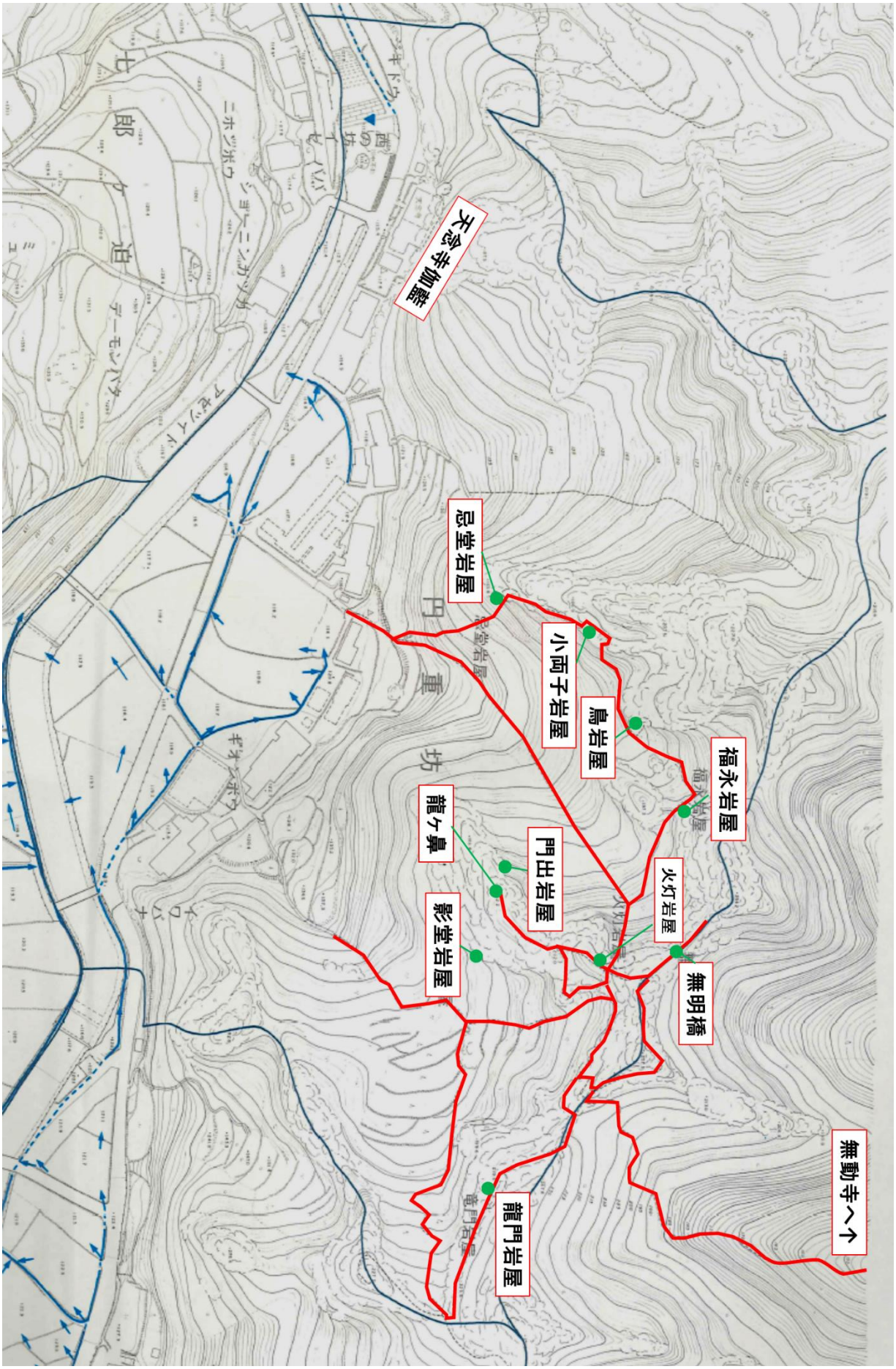
⑦『大分縣社寺名勝圖録』所収銅版画（長岩屋山天念寺境内）



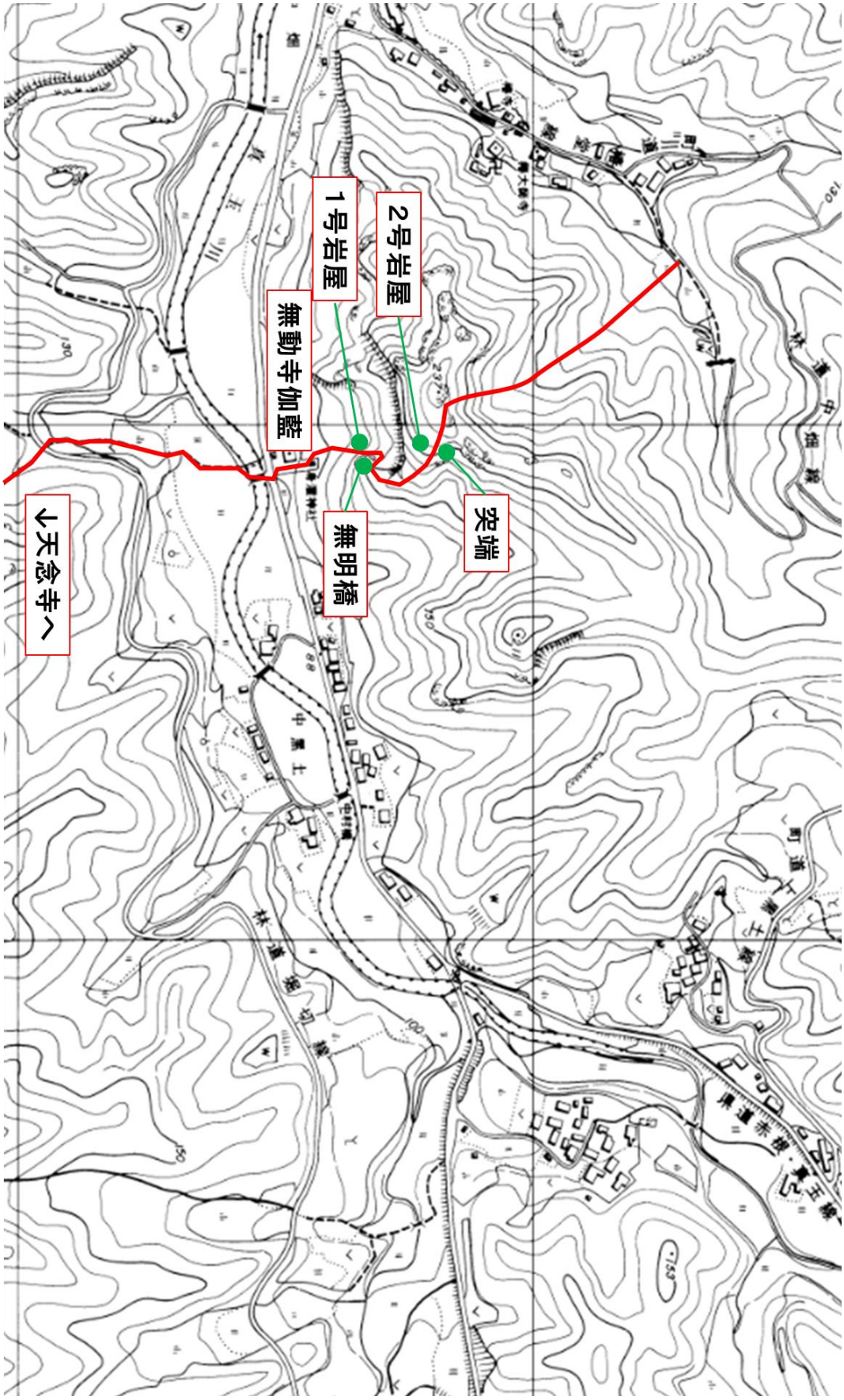
⑧天念寺境内実測図

石造仏群
地蔵
森跡
石灯篭？部材
②磨崖仏
倉庫
磨崖仏・板碑・五輪塔・庚申塔
手水石
A
①講　堂
④本殿
⑨石造仏群・再建碑
B
⑤身濯神社
⑥狛犬
⑧盥盤
⑦仁王像
⑩無縫塔
C
五輪塔
E⑫
⑬F
D
⑪石造物
G
石
川中不動
J⑯
長岩屋川
K
石灯篭？部材
石灯篭
⑰文殊種子石碑
建物
石碑
石灯篭？部材
五輪塔
石塔？
（現在建物なし）
⑲二本坊跡
M
（現在建物なし）
L⑱
（大満坊跡）

⑨天念寺耶馬峯道及び岩屋・霊場位置図



⑩無動寺耶馬峯道及び岩屋・霊場位置図



⑪天念寺耶馬及び無動寺耶馬に関する文献等

○六郷山長岩屋住僧置文案（土谷朋夫氏所蔵文書）

長岩屋地区の東隣にある三畑地区の庄屋の家であった土谷家に旧在した古文書で、都甲荘の調査の際に発見・検討がなされた。現在は大分県立歴史博物館に寄託されている。

二つの部分に分かれており、前段は応永２５年（1418 年）に作成された屋敷注文、後段は永享９年（1437 年）に作成された置文になっている。

（全文）

「本書千燈寺中ノ坊執行屋敷有」

六郷山長岩屋住僧屋敷

一拂	西ノ屋敷
中	佛供嶽
岩ノ上	徳乗拂
田口二屋敷	大坪三
水口	田中薗
御油畠	妙門坊
西ノ屋敷	西ノ坊
孫三郎屋敷	浄道屋敷
福定屋敷	香司屋敷
今井ノ屋敷	久原屋敷
上ノ屋敷	箭代屋敷
大蔵屋敷	楠屋敷
轆轤薗	智鏡屋敷
中薗	迫ノ屋敷
道心屋敷	岩武屋敷
鍛冶屋	左近三郎屋敷
道寂屋敷	妙覚屋敷
御前屋敷	道法屋敷
樋ノ口	黒法師屋敷
五郎次屋敷	長小野屋敷
茶木畠	平六屋敷

「永享九年〈丁巳〉是ヨリ下夏供米中絶再興畢、要細裏書在之、」

常力屋敷	宮司屋敷
浄心屋敷	三角畠
右衛門九郎屋敷	岡ノ屋敷
専当屋敷	道心屋敷
河原屋敷	吉武屋敷
法圓屋敷	田中ノ屋敷
貝ノ丸	陰ノ木屋敷
四郎次郎屋敷	仲薗屋しき
弁宮屋敷	香司屋しき
堀ノ内	森木屋敷

一、山内ニ居住族於不入住僧ニ者、可山中追放事、
一、山公事済期者、自其時分前々可進納也、若一月も有延引候者、自前百文拾文充利分相副可進納也、不可有緩怠事、
一、山公事以下無沙汰之於衆徒住僧者、別子細寺務へ可披露也、若有見隠聞隠者、惣住僧共ニ可為同罪者歟、其僧者彼一ヶ条先日衆徒住僧一同ニ起請文之者、争無沙汰緩怠之族隠置哉、然者就緩怠子細可罪科事、
一、山公事以下事、豊年凶年不云、不可有増減事、
一、於山公事者号難自不可有辞退、任番帳面可勤仕事、
一、夏供米畠事、縦雖有荒不作可勤仕也、荒不作者其身緩怠歟、依争其有限自往古諸役可懈怠哉、不可有無沙汰事、
右、守条々不可存緩怠所如件、
　　応永廿五年六月八日

「是より奥ハ右之裏書之分」

夏供麦畠新領九十余町、
右、夏供米畠事、松鼻より下廿屋敷不慮之中絶ニ候、当作人等任雅意自往古無之由掠申事、太以佛意冥慮不可然者也、然者任古帳之旨、于時永享九年〈丁巳〉令再興訖、仍諸下作人等不及一口問答、如本帳慇懃催勤仕事、於山外山中無其隠上者、至末代衆徒住僧一味同心無親疎可被致其沙汰者也、六郷六所権現殊醫王善逝御照覧候へ、今度再興之趣、順次任成敗衆徒等曽以不可有違失、偏供佛施僧之至、冥鑒もいかんか可有疑哉、仍後日安居之住僧連署注置者也、
　　永享九年〈丁巳〉七月十五日

豪照大徳　判有
栄銓大徳
豪栄大徳
豪順大徳　判
豪周大徳　判有
再興執行兼権別当
権少僧都豪経　判有

夏供米中絶之畠再興之至、最目出可然候、令存知訖、不可有相違者也、

吉弘石見守綱重

○六郷山年代記（長安寺所蔵）

六郷山年代記は長安寺学頭豪意が、江戸時代初頭に六郷山の歴史についてまとめたものを基礎に、代々のできごとを書き足していったもので、天念寺に関する記述も少しではあるが見られる。

（抜粋）
（前略）
甲申（応永十一・一四〇四）　四月三日長岩屋講堂・権現堂焼了
（中略）
癸酉（天正元・一五七三）　（前略）長岩屋本堂修理了、大檀那鎮信公
（後略）

○三浦梅園撰鳥居銘（現況写真③）

天念寺には国東半島・安岐郷出身の哲学者・三浦梅園が詠んだ漢詩を刻む鳥居の一部が残されている。本堂脇の国宝岩屋前に両柱の基部、そして現在は身濯神社の前に安置される正面から向かって左柱の上部（貫の下辺り）が現存している。『圖録』や古写真によるとこの鳥居は講堂の対面、長岩屋川を挟んだ先に立っていたとされ、昭和１６年（1941 年）の水害により流出したものだという事が分かる。古写真によってその全文を確認できる。

（全文）
維此仙蹤遠自養老
仰夫神徳天門之道
社鼓其鏜盥薦黍稲
有凶斯感誠敬以保

○天念寺由緒書

天念寺伽藍における堂宇・仏像・岩屋などについての明細帳の役割を果たしており、岩屋に付属した堂宇の寸法まで記してある。寛延４年（1751 年）にまとめられた。『圖録』や現況との対照により、かなり古い時代から天念寺境内がほとんど変化していないという事を伝えている。

○『大分縣社寺名勝圖録』所収「長岩屋山天念寺境内図」
（以後『圖録』、資料⑦）

上田延成が編纂した銅版画集で、大分県内の社寺の多くを収録している。天念寺の境内図は明治３１年（1898 年）に描かれたもので、当時の天念寺境内の風景を耶馬も含めて描いている。魚眼レンズ的に中心を大きく描いている点が特徴ではあるが、耶馬中の岩屋の堂宇まで写実的に描いており、実際に現地を踏査した上で描いたものであると考えられる。

霊場や名所には名前が附してある他、天念寺耶馬には四国八十八箇所の霊場を勧進した札所の番号も示してある。

（説明文）
抑当山ハ人皇四十四代　元正天皇御宇養老年間ノ創立ナリ然而飛騨ノ工匠ニ命シテ阿弥陀堂講堂及鎮守六所権現等ヲ作ラシメ本尊薬師如来日光月光之十二神アリ殊ニ岩石ニ彫刻ノ不動明王竝ニ千手観音ハ仁聞菩薩ノ御作ナリ境ノ内外ニハ八十八箇ノ弘法大師圍繞シテ一佛乗ノ眼海ニハ天台止観ノ水漲リ真言密咒ノ浪渦キ来テ一切煩悩ノ炎ヲ消ス一大輪煩タル名刹ナリ斯ル尊キ霊場タル故建久年間ノ大守大友左近将監能直公厚ク信仰アリ大般若経ヲ書寫シ御納メラレ又寺領等モ御寄附アリ然ル天正十四年薩兵乱入ノ際兵燹ニ罹リ古文書及古器物等悉皆鳥有ニ皈ス其后本堂庫裡再築ス于時延宝年間領主肥前国嶋原城主松平主殿頭公深ク皈依アリ金員若干ヲ寄セラル爾来今ニ至ル迄法燈連綿タリ
維時明治三十有一年五月

当山現住
金谷順敬謹識

○西国東郡誌

『西国東郡誌』は、大正１２年（1923 年）に刊行された豊後高田市を対象とした最初の地誌で、六郷山寺院やその周辺の景観についてまとめられている。

西国東郡誌では天念寺について「此ノ地山脚迫って峡渓を為すもの、長さ一里餘、峻厳地を抜く数百丈、

絶壁削るか如きもの、簇々として其間に屹立し、風光宛然魔姑の屏障を聯ぬる観あり。奇松巌肩に生じて蟠根絶壁に懸り、翠蘿半腹を封じて碧色滴るが如きの下、一道の潤水潺々として流る。絶景壮観言ふ可らす。近時下だすに都甲耶馬の稱を以てす。之れを前豊山國の勝に比す。敢て一歩の遜色あるを見ざるなり。」とある（古写真⑧）。

また、西国東郡誌では無動寺後背の耶馬を「奇勝中の奇、絶景中の景」と評している。「六郷満山の精舎一ツとして凡域索莫の境に在るもの無く、皆な山水の奇勝をトめ、眺麗の絶景を有せざるはなし、而して上真玉村小岩屋山無動寺は、奇勝中の奇、絶景中の景をト有し、二十有八寺中の出色たるものと謂ふて可ならん。梵宮の後背に崛起せる長さ約六七百間許の一大巌障は巍峩をして半空に峙ち、皺劈縦横鮮かにして仕工の斧痕を留め、嵓□深浅緑碧を漲らして魔姑の筆力を示す。壮大の奇観、予が徒の拙文、千一を髣髴し得る所に非ず。」とある（古写真⑩⑪）。

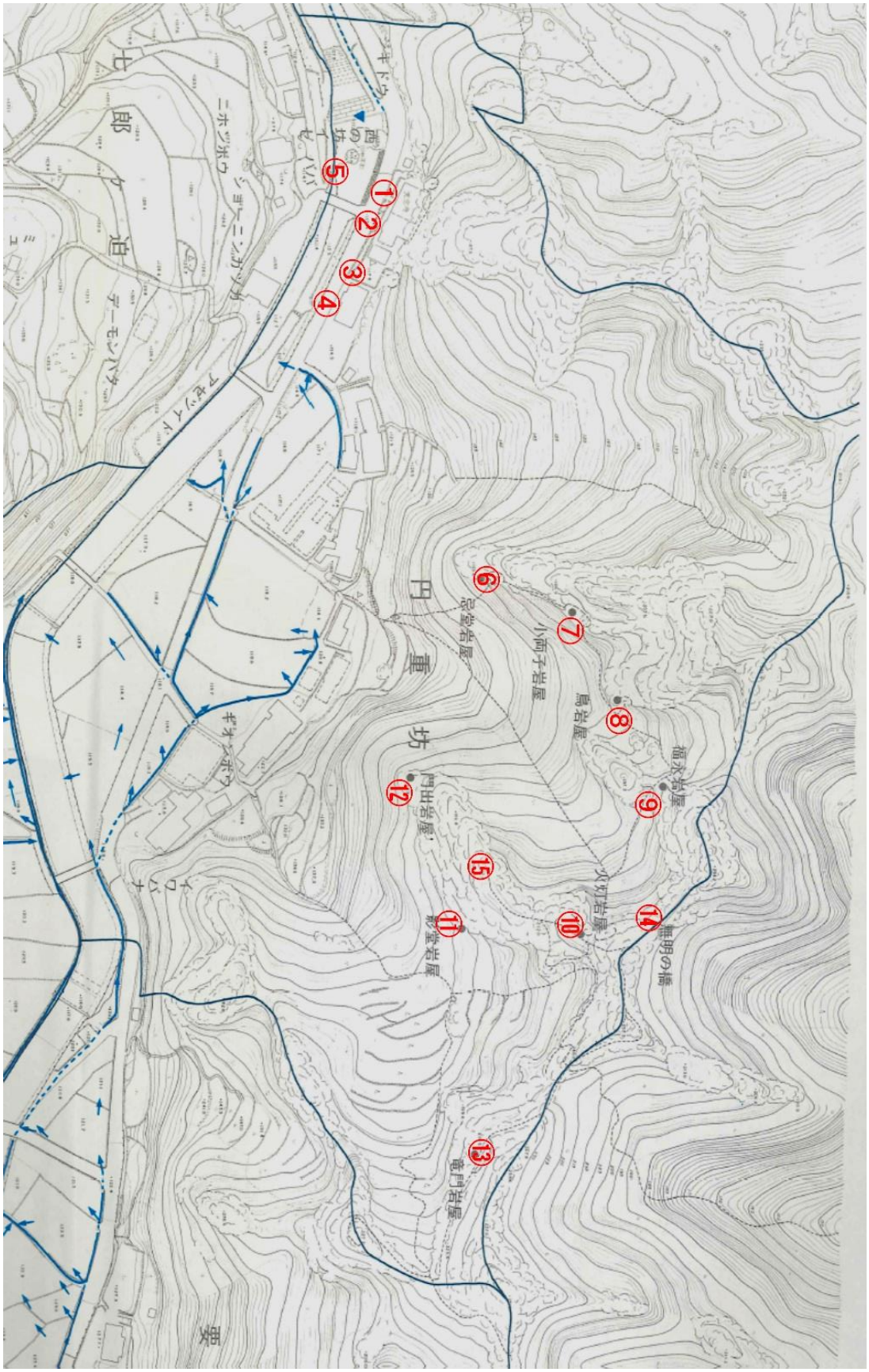
○種田山頭火書翰

種田山頭火が昭和４年（1929 年）に国東半島を訪れた際に、萩原井泉水に対して出された書翰。天念寺・椿堂（黒土谷）の風景について「小耶馬渓とでもいひたい山間」と、「岩山の景勝」についての評価がなされている。

「昨夜は山家に泊まりまして、ひとりでしんみりしました。今日はしぐれる岩山を四つ越えました。両子寺、天念寺、椿堂、どれも岩山の景勝を占めてをります、このあたりは小耶馬渓とでもいひたい山間であります、毎日の時雨で行乞が出来ないで時雨の句ばかり出来ます　二十六日　豊後赤根にて」

写真編

A　現況写真（天念寺）



現況写真①
天念寺講堂

現況写真②
身濯神社

現況写真③
三浦梅園撰漢詩の鳥居
残欠（国宝堂前）

現況写真④
本堂

現況写真⑤
川中不動

現況写真⑥
忌堂岩屋

現況写真⑦
小両子岩屋

現況写真⑧
鳥岩屋

現況写真⑨
福永岩屋

現況写真⑩
火打岩屋

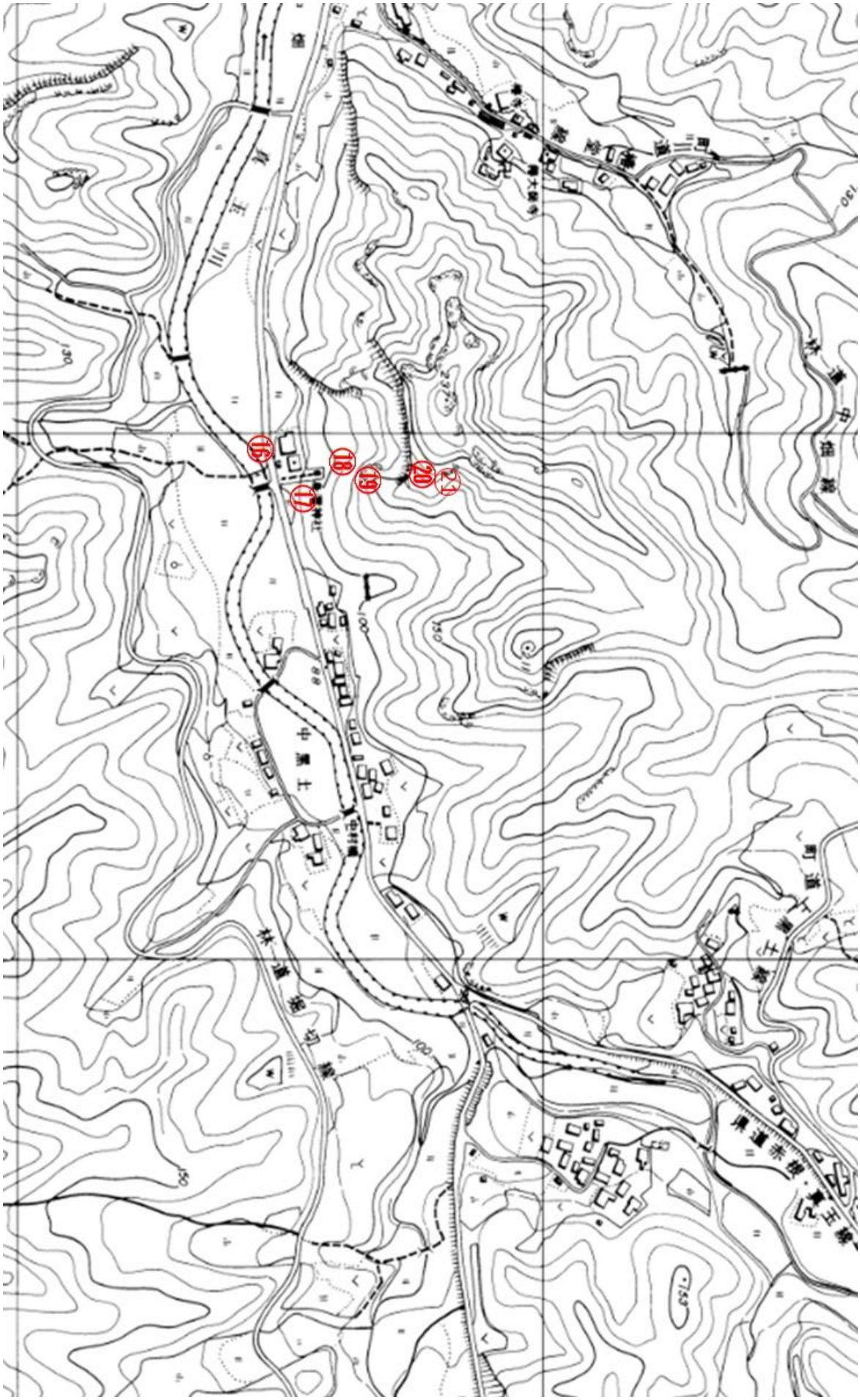
現況写真⑪
影堂岩屋

現況写真⑫
門出岩屋

現況写真⑬
龍門岩屋

現況写真⑭
無明橋

現況写真⑮
天念寺耶馬
（右露頭が竜ヶ鼻）


中
川
中
川
中
川

現況写真⑯
無動寺遠景

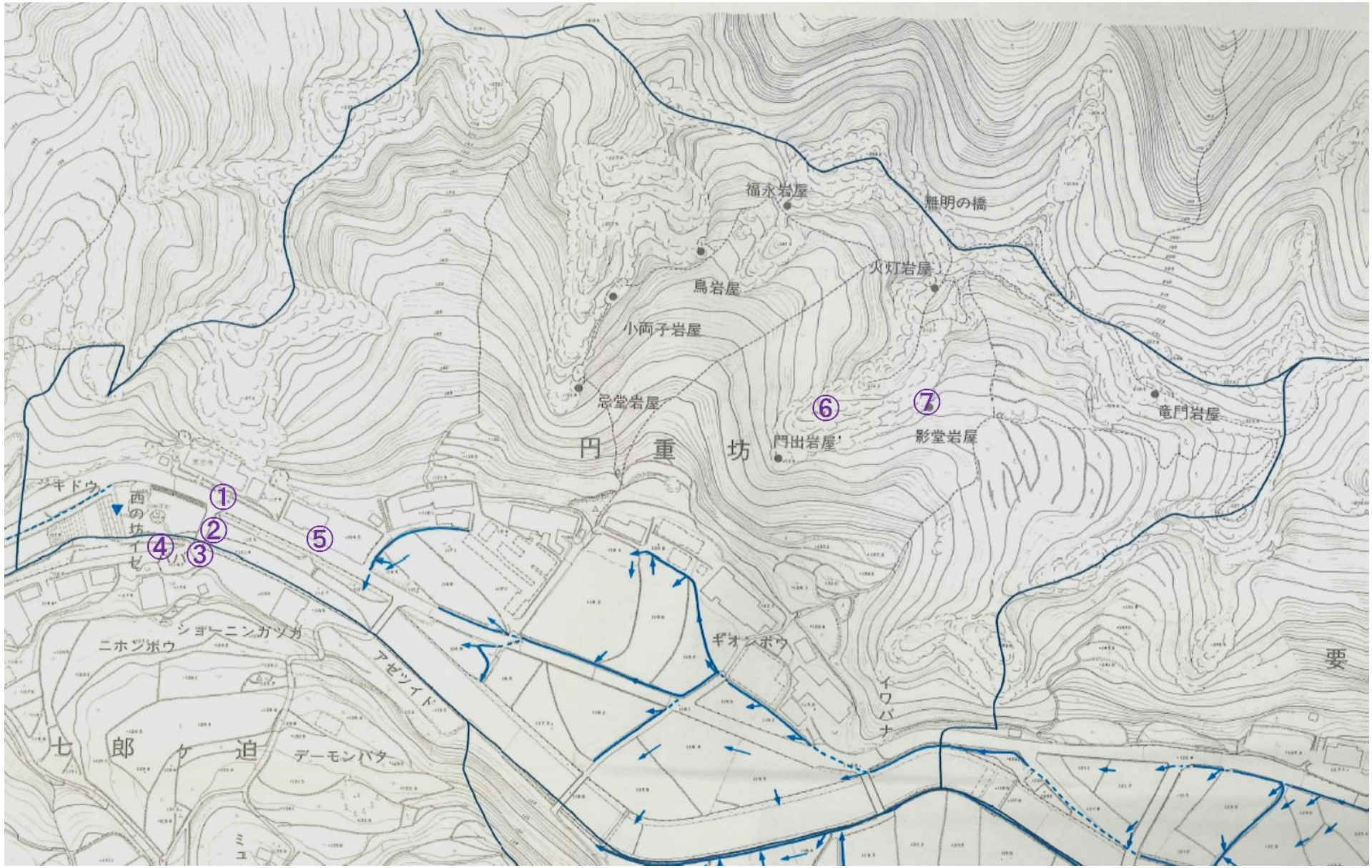
現況写真⑰
身濯神社

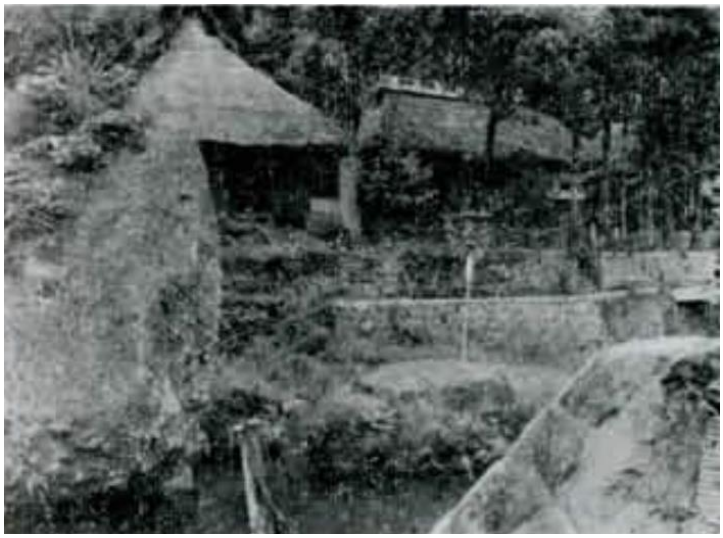
現況写真⑱
１号岩屋（不動岩屋）

現況写真⑲
無明橋

現況写真⑳
２号岩屋（上宮）

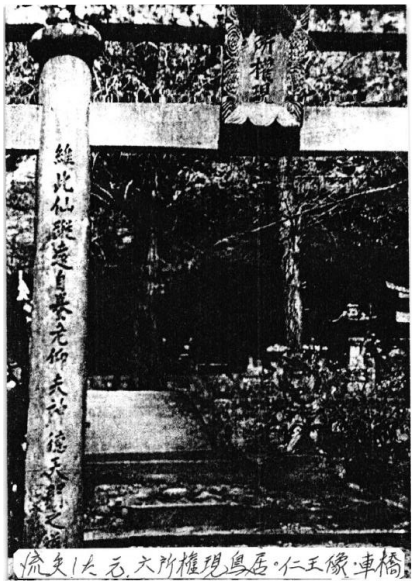
現況写真㉑
展望台


福永岩屋
無明の橋
火灯岩屋
鳥岩屋
小両子岩屋
忌堂岩屋
円重坊
門出岩屋
影堂岩屋
竜門岩屋
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
ジキドウ
西の坊
ニホンボウ
ショーニンガツカ
アゼツイド
七郎ケ迫
デーモンバタ
ギオンボウ
イワバナ
要



古写真①
天念寺伽藍遠景
昭和３０年代

古写真②
講堂・車橋・仁王
昭和初頭



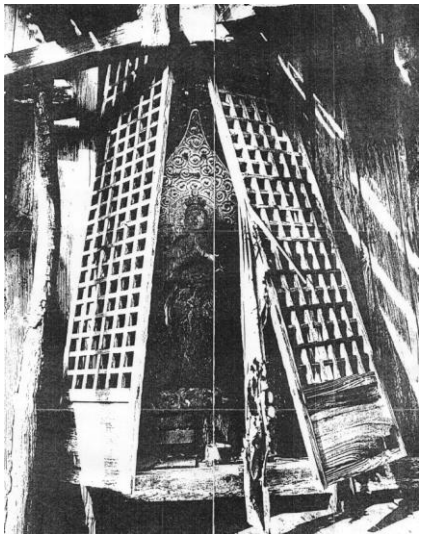
古写真③
三浦梅園撰漢詩鳥居
昭和初頭

古写真④
護摩堂及び車橋
昭和初頭

古写真⑤
天念寺本堂
昭和初頭

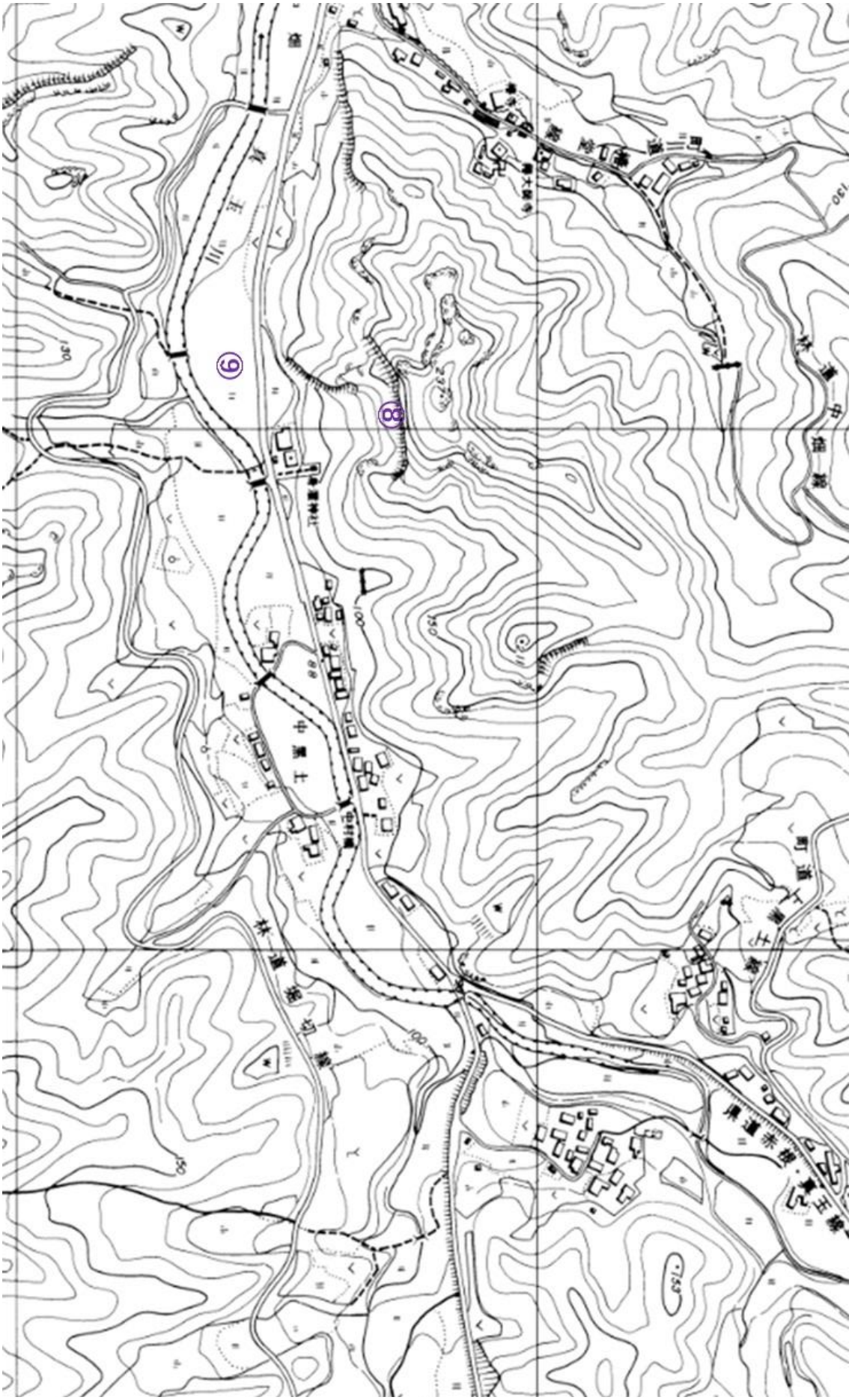
古写真⑥
天念寺耶馬
昭和３０年代

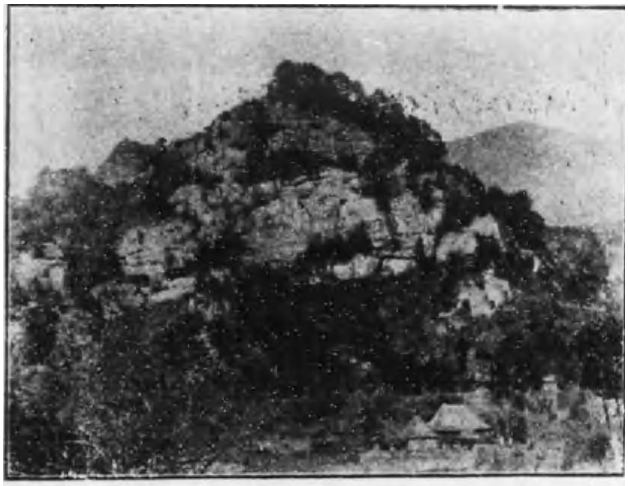
古写真⑥
天念寺耶馬全景
大正年間



古写真⑦
影堂岩屋
昭和３０年代

B　古写真（無動寺）



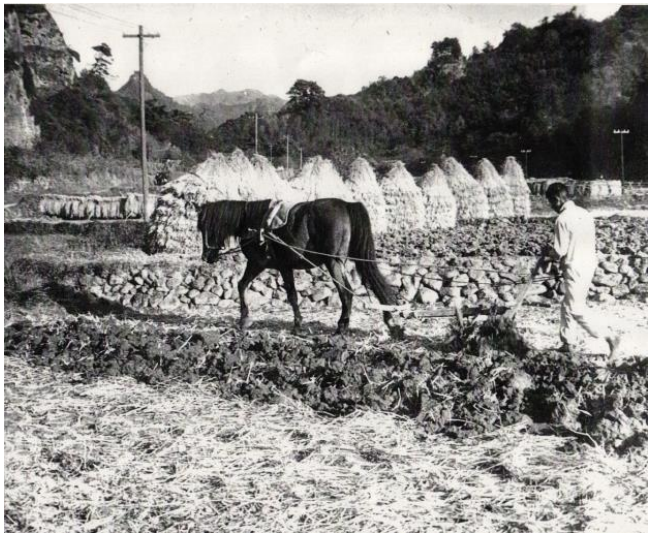


無動寺岩壁の景

古写真⑧
無動寺岩壁の景
大正年間
『西国東郡誌』より

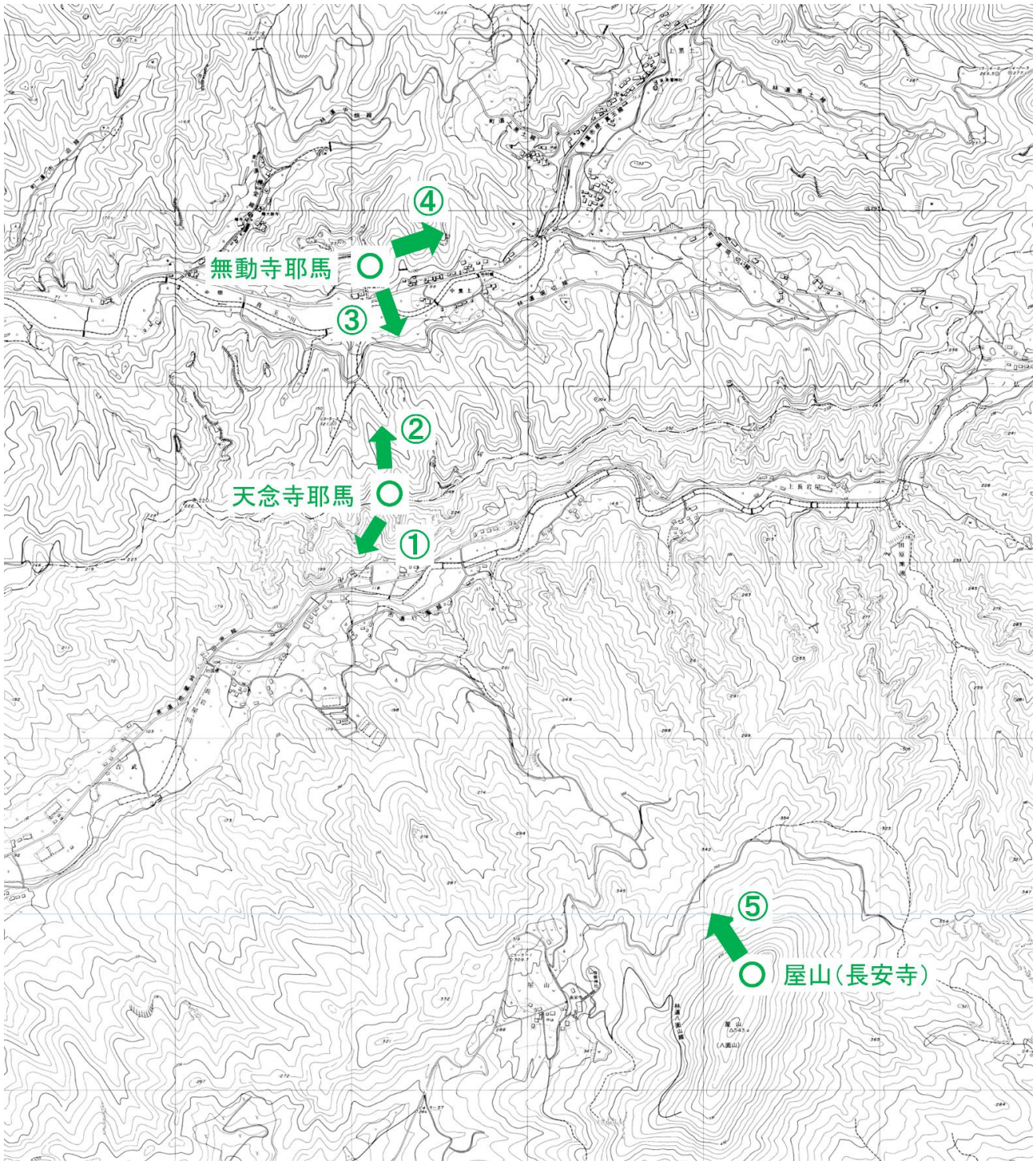
上真玉村無動寺岩全景

古写真⑧
上真玉村無動寺岩全景
大正年間
『西国東郡誌』より



古写真⑨
黒土谷
昭和初頭

C　周辺写真



周辺写真①
天念寺耶馬無明橋より
都甲谷を望む

周辺写真②
天念寺耶馬無明橋より
無動寺耶馬を望む

周辺写真③
無動寺耶馬無明橋より
天念寺耶馬を望む

周辺写真④
無動寺耶馬より黒土谷を望む

周辺写真⑤
屋山より天念寺耶馬及び無動寺耶馬を望む

天念寺耶馬及び無動寺耶馬　名勝調査報告書

発行日：平成２８年１２月２０日
発行者：豊後高田市教育委員会
〒872-1101
大分県豊後高田市中真玉 2144-12
TEL：0978-53-5112

黒土不動尊無動寺